

て、あれ程の頭数を纏めて来たのは、何處かに一種の力があると思ふ。夫れは彼れが官僚に吠えもせず、噛み付きもせず、尾を俛れて黙つて居たからだと言ふが、滿更其の屈從の恰憫だけでも無いやうである。

三

安達は今日加藤總裁の世話女房となつて、憲政會の所帯を切り盛りして居るが、別に衝突もせず、圓く治まつて居るやうである。濱口總務は口八釜しい叔父のやうに随分喋舌るが、總會でも議會でも演説は其の方に譲つて、彼れは専ら手を動かして居る。實際彼れは經綸抱負を誇るでも無からうから、自分の長所に向つて手腕を揮ふのは、最も策の得たものであらう。

彼れの政界に多少知られたのは、明治二十九年の頃、熊本國權黨常務員に擧げられた時にある。其の以前は朝鮮で小新聞を經營して、怪しげな氣焰を吐いて居た。尤も佐々友房などの感化もあるであらうが、夙に心を政治の方面に傾けて居た。夫の朝鮮王妃殺害事件の嫌疑を受け、諸名士の中に彼れの名も見えたので、安達謙藏は忽ち疑

問の人となり、問題の人となつた。若し彼れを大きく見せた抑々はと云へば、即ち此の事件なのである。けれども、彼れは事件の中心人物ではなく、寧ろ其の附録の觀があつた。併し附録でも何でも事件は事件であつたから、彼れも亦一廉のやりてのやうに思はれ、政界に將來ある人物として指目されたのである。此の時分から大に浪人と交り、國士を以て任じて居たなら、或は穢多村などと惡口されずに済んだかも知れぬが、何う云ふものか、彼れは柴四朗等と河岸を換へて官僚黨となつたのである。佐々の後繼者となるには、佐々が薩軍に投じて傲語しながら、後に長閑の品川彌二郎に降参したやうな容となつた、其の故智を學ばねばならなかつたのかも知れぬ。然る事事が彼れの政界に乗り出すに便宜で、地方的勢力を自分に集中するに都合が好かつたのであらう。何と云つても、熊本は國權黨の地盤で、其の系統の者でないで勢力を得難いのである。彼れの今日、熊本の政界に雄視し、總選舉の時にも思ふ存分に猛威を揮ふことの出来るのは、全く之が爲めである。

夫れに彼れは、選舉運動に掛けては、一種の冴えた腕を持つて居る。能く各候補者

の意思や、地方有志家の進言に聽いて、ちやんと必勝的計畫を立て、夫れを遂行する爲めには、必勝的の一切の手段を講ずるのである。前回の總選舉に於て、政友會の多數を打破つたのは、畢竟するに此の計畫と手段とに外ならぬのである。尤も大隈の人氣と、我黨内閣の威光の選舉に影響した事勿論であるが、其の趨勢に乗じて必勝の算を立てた、彼れの能力も亦認めねばならぬ。郷里に於ける彼れ自身の敗衄を見て、早くも彼れの勢力の失墜なり、策戰の拙劣なりと斷することは出来ぬ。彼れの敗衄は、確かに敗衄に相違なきも、彼れの戰友の急を救ふ爲めに、自分の投票を餘りに裂き過ぎたからである。が、自分一人落選したのみで、他は悉く無事なるを得た。究り大局から見れば、其の勝算は歴々たるものである。後日當選者の一人が辭したので、彼れは日比谷に其の姿を現はすことを得た。彼れが今次の總選舉に對して、如何の必勝的計畫を立てるか、容易に覗ひ知ることを得ぬが、在野黨だけに尠からぬ困難の伴ふ事であらう。前回に豫期以上の成功を收めた彼れは、今次は豫想外の不成功に終るかも知れぬ。眞個彼れの力量を示すは、一に來るべき逐鹿戰にある。

四

江藤は政友會の幹事長で、まだ四十六歳の新人物である。由來政友會は野田卯太郎とか、奥繁三郎とか、永江純一とか云ふ舊人物を幹事長に擧げたが、漸次新人物が増加し、少壯者の氣焰が高くなるに従つて、其の不平を緩和すべく、少壯者を幹事に登用するやうな傾向になつた。此の老人連が隱退氣味となつて、少壯者の頭を擡げるに至つたのは、少くとも政友會の一進歩で、又黨内に新人物を吸収する所以であつた。江藤の幹事長に推されたのは、彼れの才幹、經歷、乃至勢力に由ること勿論であらうが、此の空氣の關係も亦少からず有る事と思ふ。

彼れは明治三十二年の東京専門學校(早稻田大學の前身)卒業生で、其の五年後には早くも代議士となつて、中央政界に乗り出して居た。其様な所から見ると、知事の古手や成金などが方便的に代議士となつたり、一夜漬の政黨員となつたりするとは違つて、夙に志を政界に立てた事は分る。既に彼れの政界に乗り出したのは、醉狂でも餘興でも無いのだから、黨事に奔走するにしても身が入つて居る。餘り金が要るやうな

ら逃げ出さうとする様な逃ツ尻もせず、さりとして此の商賣で一儲けしようとする様な瀆職的卑劣心は無いやうである。世の中には随分代議士を商賣と心得て、儲けに有付く積りで出て来る者がある。籍を多数黨に置いて間違なく起立さへすれば、夫れで利益に均霑し得るやうに想つて居る者もある。夫れ等を一括して鷄群と見れば、彼れは一鶴位の美しさに見える。けれども、其の風采から見れば、何う見ても拂溜の鶴では無い。彼れよりも男振の好い者は政友會中にも幾らもある。憲政會の河野廣中のやうに容貌を資本として、自己を吹聴し、自己を大きく、豪さうに見せることは出来ぬ。矢張彼れは實質の光澤を以て政界に莅み、黨人を信服させ、且操縦する外に仕方が無い。生中自己を餘りに高く評價し、他を嘗めて掛かると、思はぬ失敗を演ずる者である。江藤は沈着で、然う煽動にも乗らず、頭腦も明晰であるやうだから、幕僚としては押しも押されぬ人物であらう。曾て逓信省の勅任參事官となつたから云ふでは無いが、彼れは役人なれば事務官級、黨員なれば幹事長格の人物で、手腕の冴えはあるが、懐あひは大きくない。野田の茫漠、奥の豪傑肌、永江の金力は無く、又彼等の

圖太さと辛辣さも無いが、眞面目に手腕を黨務の上に働かす事に於て、危険が少からう。總選舉に對しては何程の經驗も無いから、選舉上手の安達と互角の競争は出来まいが、或筋の便宜に由つて、其の缺を補ふことが出来るかも知れぬ。人物には多少の非難があつたが、總選舉の策戦は伊藤大八などが舊式ながら上手であらう。兎に角、今次の逐鹿戦は、江藤の最も腕を揮ふに可い初舞臺である。彼れが如何にして、豫期の成功を收め得んとするかは、政界の注目値する。

五

國民黨の古島は兵庫縣豊岡町の産で、明治四十四年東京市の補缺選舉に代議士を贏ち得た人である。理想選舉で當選したと云ふことが彼れの唯一の誇りであるが、當時彼れと太刀打をする程の金力候補者もなく、強敵も無かつたから彼れをして此の誇りを擅にせしめ得たのである。彼れは中村敬宇、杉浦重剛等の門に英漢學を修めただけであつて、氣骨もあり、文章も旨い。往年子規の遺稿を出版した時、彼れは一部の俳人から其の行爲を非難されたが、其處には彼れの輕卒と、他の嫉妬があつたやうだ。彼れ

の人格に多少の雲翳が生じたのは其の時だけで、程なく晴れて了つたやうだが、今尙其の記憶を繰返して古一念を非難する俳人の無いでも無い。が併し、夫れはほんの狭い範囲だけで、知人の多くは彼れの氣骨を稱し、世人も亦然か認めて居る。彼れは多年新聞記者生活を續け、堂々の論陣を張つて居たが、富貴には餘り縁遠いやうである。保守主義の『日本』から、現代主義の『萬朝』に轉じてから、何程か圭角も取れ、餘裕も出来たやうであるが、まだ昔はがねが摺り減らずに光つて居る。其の氣骨がもてるのか、貧骨が同情を得るのか知らぬが、東京には可なり人氣がある。神田の貸席松本亭の女將が彼れに同情を寄せ、彼れの選挙運動を助けたのは、縦令大した事ではないにせよ、彼れが人氣の舞臺を華やかに引立て、居る。が、今度彼女は日下部某を應援するさうだし、本所方面は伊藤痴遊に侵略される怖れがあるさうだから、餘程の苦戦だらうとの事である。

國民黨の智囊に操觚者が多いが、彼れは鐵中の錚々たる者である。彼れの文章は却々確かりしたもので、國民黨の宣言や、報告書などは多く彼れの手になるのである。

然らば彼れは單に文章だけの人かと云ふに、機略にも長じて居る。陣頭に立つて指揮するよりも、寧ろ帷幄の參謀たるに適して居る。可なり長い間政治に奔走してゐるから、其の呼吸なり、掛引なりを知つて居る。神算鬼謀湧くが如き天才的參謀では無いが、著實に打算的に計畫を立て、秋毫の過なきを期すると云つた風である。機略縦横怪辣無比の犬養に配して、始めて適劑たり得るので、茫漠たる人物の女房役には向かないかと思ふ。

曰井は其の姓名からして、尨大な、位體の知れぬ人物のやうな印象を與へる。其の如く、彼れは豪傑肌の人物のやうに思はれて居る。先年瀆職罪で暗い所に行つた時も、他の罪までも引つ被つて大に度胸を見せたとかで、爪弾きする所か、何處かに偉い所があるご内々褒めて居た人もあつた。彼れが前回の總選挙に當選したのも、或は其様な所に同情を繋いで居るのかも知れぬ。が、彼れ自身としては、遠慮して然るべきであつた。夫れとも彼れは、剛愎な星亨を學んで、其の圖太さを見せようと云ふのかも知れぬ。彼れは今日寺内黨の謀士となつて居るが、其の背後には秋山定輔が控へて居

るでは無いかと思ふ。彼れは元來安達等と同じ畑の人物だが、安達とは反りが合はず、却て其の排斥する所となつた。策を以て争ふ事になれば、白井は到底安達の敵では無い。夫れだけ彼れには、清濁併せ呑む底の度量が有るであらう。

斯う書いて見ると、來るべき逐鹿戦の謀士は、古島を除くのは、皆九州系の人物である。即ち安達、江藤の両者は熊本、白井は長崎である。而して白井の清濁併呑、安達の權略、江藤の手腕、古島の智謀は、今後の政界に如何の色彩を投げ、如何の波紋を織るであらう。(大正六・二・一七)

中篇 人物小品

島田三郎論

◎春雨香油の如く到りて、松柏の綠新に、揚柳更に一段の春色を加ふ。燕は簷頭にありて、囀ること頻り也。

◎吾人は、此のビツ／＼と囀る聲を聞いて、端なく島田三郎の饒舌を想起す。衆議院の傍聽席にありて、彼れの面を見ずして其の廣長舌を弄するを聞けば、宛ら障子を隔てて燕の囀りを聞くに異ならず。

◎彼れは沼南と號し、又召南に作る。湘南の産也。蓋し燕は南より來りて巢を覚め、彼れ亦來りて居を東京麴町に構ふ。其の口舌に於て、去來に於て、燕を髣髴するは奇なり。

◎笑ふ者は曰く、彼れは三郎に非ずして、喋郎也と。然り、彼れは日本一の喋郎也。

能辯家也。演説屋也。口から先に生れたとは、眞に此の男の事也。しやべらざれば、彼れの男が立たざる也。

◎彼れは人間の燕也。燕の囀ると、彼れの喋舌ると、全く天性に出づ。口舌を弄せざれば、一日も生きて居れざる也。よし生きて居れても、存在の價値を失ふ也。吾人は燕の囀りを甚だ好む者に非ざれど、喋郎の能辯は敬せざるを得ず。彼れの能辯は人格の聲にして、甚深の意味を有すれば也。

◎しやべる事に因りて畏敬せらるゝものは、しやべる事に因りて侮蔑せらる。能辯に因りて名聲を博したる彼れは、過度の能辯に因りて往々嘲笑せらる。然れども、彼れは何れの時にも、何れの場合にも、何れの問題にも、能辯を揮はざれば止まざる也。人間の燕は遂に政界の燕也。議會の燕也。

◎彼れ喋郎はしやべる事に因りて、政界を直線的に翱翔し、議會を自由に飛行し、去來す。鴻雁の列をなすに非ず、雀鳥の群を成すに非ず。時に三四と連れ立つ事なきに非ざるも、多くは單獨にして疾風の如く翱翔す。平安城頭を筋がひに飛ぶ燕と雖も、

悉らく喋郎の敏捷なる翼を羨まん。

◎彼れは曾て、筆の人として知られき。彼れが著したる『開國始末』は、天下を風靡せり。當時の讀書子として、本書を讀まざるは大耻辱たりし也。是に於てか沼南は思想界の先達となれり。然れども、今や老いたり。

◎筆の人として彼れと名を等しうせるものに、犬養木堂あり。尾崎悋堂あり。而も委曲周到、理盡し論盡せずんば歇まざるの點に於て、沼南は二者に勝れり。その迂餘曲折の妙を極めんとして、却て冗漫に失するは沼南の病也。獨り文に於て然るのみならず、演説に於ても亦然り。木堂の勁健簡潔にして痛快なる、悋堂の爽亮にして明快なる、一は他の肺腑を衝き、一は他が胸裡の一線に觸れずんば歇まず。沼南は政府者を攻撃する時に於てすら、痛快なるべくして痛快ならざる也。

◎三宅雪嶺は訥辯の雄なるもの也。沼南は能辯の傑なるもの也。二者もし同一の論題を提げて、同一の演壇に立たんか、雪嶺の訥、或は沼南の能より以上に、聽者を感じせしむるやも測る可からず。訥なる者の一語一句は宛ら肺腑より出づるが如く、能な

る者の數萬言は舌端より迸るが如ければ也。一は眞實にして、一は輕浮の感なからずとせず。

◎雪嶺の演説、多くは草稿を作らず、懐手の無造作なる體にて演壇に立ち、前辯士の説を駁するを常とす。沼南の演説せんとするや先づ草稿を作り、大體の腹を極めて、然る後始めて壇上に立つ。雪嶺は出鱈目也。沼南は眞面目也。一は点滴の石を穿つが如く、一は江河を決するが如し。然れども、出鱈目なる雪嶺の演説が強く印象を與ふるも、眞面目なる沼南の演説は殘留する所何物もなき也。一時の華麗はあり、壯觀はあれども、永久の力はなき也。

◎彼れの顔は、狎の如く愛嬌あり。いつも笑つてゐるやう也。卓上に丈餘の巻紙を繰り擴げつゝ演説する所、大黒様の札でも數へておちやるやう也。嘲げらんとして莞爾たり。怒らんとして莞爾たり。莞爾たるに於て、彼れの演説の權威の幾分は滅殺せらる。喋郎のしやべるに於て、喋郎の變化なき顔が大に損なり。天分の舌に福にして、顔に貧なりしを恨むと雖も、生後五十有餘年の今日、はや如何ともすべからず。

◎大石正巳の演説は、大風呂敷也。聽者を厭かしめず。島田の演説は、年寄の小便也。往々にして他を厭かしむ。短きも一時間、長きは二時間に渡る。目を瞑つて聽けば、そんなに早く厭かざれど、巻紙を睨みつゝ聽けば、其の半に至らざるに厭きて了ふ事妙也。不熱心なる議員等の、彼れの演説中に欠伸をなしたり、座を立つたりするは、全く之が爲めなり。

◎彼れの舌の最も有効なるは、他の演説中に質問するに適す。昨年の議場に於ける三稅廢止案討議の際の如き、即ち是也。他の一語を發するうちに、彼れは既に十語を發す。他の愚圖々々してる間に、言ふだけの事は言つて了ふ也。女髮結の喧嘩に勝つは、必ず口の早い奴也。敢て、彼れを之に比するには非ず。

◎彼れは思つたより以上に、神經質の政治家也。癢に障ると、忽ち感情に走つて了ふ也。世上の毀譽褒貶を殊の外氣に掛ける男也。書生を叱り飛ばす男也。顔の莞爾たるは眞に心中の愉快によりて然るに非ざる也。顔の造作と心の状態との必ずしも一致せざるは、聽て彼れの人格を語らずんばならず。彼れは正しく二重人格の政治家也。

◎江戸ッ兒の智識ある者は、多くは二重人格也。獨り彼れのみに限るに非ざれど、彼れの二重人格たる事を知る人稀なるを以て、特に茲に言つて置く也。彼れは世人の信する如く、儘かに直言直行の士なるべし。然れども、二重人格の政治家也。極端に聰明なる人也。

◎先輩に對しては相應に愛嬌を振り蒔き、御機嫌も取り、選舉區の有力家にはペッコと頭を下ぐれども、後進に接するや頗る傲然たるものあり。曾て彼れの部下にありて記者たり、現に相應の地位を得て居る者、偶ま彼れを往訪するも、彼れは舊時の如く冷遇する也。剛慢な鼻をうごめかす也。無論玄關までの見送などはせず、ぶいと奥座敷に去つて了ふ也。十遍に一遍位は見送する事あるも、开は話が残りたる時にて、ぶつくと小言を云ひ云ひ玄關まで送り來る也。木堂の、一書生に對してまで、君僕と云ひ乍ら胡座を掻いて談論風生するとは、甚だ趣を異にす。

◎木堂の度量は大と云ふ能はざるも、豪傑風はあり。沼南は小心翼翼々として、役人臭を脱せず。ちよつと威張つて見たがる所、穉氣滿幅也。彼の誇らんが爲に嚙舌る事あ

る、全く此の病あるに因る。

◎彼れは政黨の首領たるべき器に非ず。又新聞社の社長たるべき人にも非ず。彼れは政界に於ては一騎打の武者、操觚界にありては主筆位が關の山也。

◎東京毎日新聞を經營して、失敗したるは彼れ也。記者輩の信服を得ざるも彼れ也。彼れは何でも人任せにする事が出來ず、些末の事にまで干涉する也。三面記事にまで朱を加へざれば満足が出來ざる也。『社の馬鹿野郎が……』とは、社員が彼れを冷罵するの一句なりし也。

◎彼れは金にケチ也。社員に俸給を拂へぬまで社が困つて居ても、彼れの家計は豊かなりし。木堂が無いと云へば、犢鼻褌の中にも無い男也。沼南が無いと云つても、臍線金位は有る男也。ケチと云はんよりは寧ろ用心が可いと褒むべきなるやも知れず。

◎彼れの居宅は待合式也。玄關を入らざるに、既に待合のやうだとの感を禁する能はず。その燈籠の如き、塗火桶の如きも亦待合式也。知らず、これ彼れの江戸ッ兒肌の然らしむる所乎。

◎能く聴けば、彼れの辯舌はべらんめえ的也。唯その上品なるのみ。赤チヨツキ藏原惟郭の如く、餘りに調子に乗り過ぎざるを多とす。

◎政治家としての彼れが歴史は、餘りに平凡也、強ひてその異彩を求むれば、改進黨創立の一事のみ。蓋し、政黨員としての彼れの生命の最初にして、又最終たるなきや。

◎然れども、偶然にも牡丹餅は棚の上に供へられたり、新政黨組織の事、即ちこれ也。彼れは舊來の縁故を以て、憲政本黨の改革、非改革の兩派より相談を持ち掛けられたり。自重して立たば、彼れは立派に男をあぐべかりし也。然るに、彼れは秋風の前の燕の如く、翩々として飛舞せり。未だ彼岸に達せざるに、羽翼は既に傷けり。憐むべし。(大正四、二、四)

河野廣中論

◎東北の野、由來奇物、珍物、怪物尠しとせず。故工藤行幹の珍なる、柴四朗の奇なる、原敬の怪なる、何れも一癖ありさうな面魂の人物也。夫の河野廣中に至つては、

實に怪中の怪なるもの也。

◎然れども、河野は別して怪物らしい顔付もして居らず。又、怪物らしい服装もして居らざる也。唯見る、白皙豊頬にして長鬚雲の如く、泰然として破顔微笑す。其の懐くべくして、怖るべきを見ず。あゝ是れ何の怪物ぞ、一個の温厚翁たる也。

◎路傍に一糞あり、陽春の小山の如く色彩鮮かに、而も豆痕斑々たり。臭氣紛々として鼻を突く、近かすして其の糞なるを知る。怪の怪なるは、猶この糞の糞たるが如く、未だ以て大悟の域に達せざるもの也。然るに、其の糞の乾からびて、乾芋の莖とまがひ、蒲公英の枯莖とまがふに至つて、却て其の怪の怪なる所以を増す也。河野の如きは、この乾からびたる糞より以上の代物にして、既に怪の域を超絶して平凡化したるもの也。

◎彼れに臭氣なきは、全く之が爲めならずんば非ず。沈香も焚かず屁も放らざるが如き温厚翁の怪、吾人は之を偉大なりとす。

◎彼れは醉餘興に乗ずれば、筆を揮つて紙絹を汚す。一片風流の骨あり、落款して磐

州と云ふ。然り、彼れは磐城三春の産也。

◎彼れは政界の耆宿也。東北の政界に於ける唯一の勢力家也。河野廣中の名、今なほ東北政界の耳目を聳動す。

◎然れども、正直のところ、彼れは歴史中の人物也。現在に立脚して、現時の政界に活動する所、僅かに二分也。敢て、女房に手を焼きたるを見て、彼れの老いたるを云ふには非ず。

◎かの廢藩置縣の際、翼を許されたる青年子弟にして、才幹あるもの、行くべき所は、教員か然らざれば役人なりし也。河野も亦御多分には洩れず、福島縣廳の役人となりて、先づ飯櫃にありつきたり。然れども、彼れの脈管に郷士の熱血は流れたり。維新の屈辱を雪がんとは、密かに彼れの期したる所也。年少の霸氣と鬱勃たる不平の念とは、彼れをして縣廳の小吏に満足せしむる能はざりき。

◎時、泰西の思想は澎湃として舊屋を浸し、自由民權説は、狂奔怒號して青年の頭上に瀧下し來れり。彼れは、手に唾して起てり。これ、彼れが時代の兒たるの最初たりし也。

◎明治九年前後は、社會の最も混亂を極めたる時代也。破壊は既に行はれて、建設未だ緒に就かず。政治上に於ける権力の争鬭紛紜跡を絶たず、一波起つて萬波を生み、濁浪空を涵して天日を蔽はんとせり。彼れが演じたる福島事件の如きは江藤新平、西郷隆盛の悲劇に比すれば物の數にも足らざるも、彼れの歴史上には閑却すべからざる一大事件也。換言すれば、此の一大事件が彼れをして政界の人たらしめし動機にして、彼れの運命を開きたるの鍵ならずんば非ず。

◎勿論大局の上より觀れば、彼れの政界に重きをなせる所以は、福島事件に非ず、加波山事件に非ずして他にあり。然れども、彼れが民權自由の犠牲者たらんとの決心を具體したるものは是れ也。かゝる一生懸命の時代に於ける政論家には、今日の代議士の如く、砂糖を嘗めて、蟻族化せんとするものは一人もなかりき。

◎あつばれ河野の腕をあげたるは、彼の大阪會議也。彼れは會議の結果によりて、故片岡健吉と共に、關東關西の兩代表者として民選議院設置の請願をなすの光榮を荷ひ

たり。當時、彼れの得意や想ふべし。

◎時代はガラリと廻轉す。彼れが得意時代は然う長くは續かず、追々と新時代の要求に應ずる人物が出て來て、單に空名を擁して悶々するに至れり。彼れは島田三郎の如き神經質の政治家に非ざるも、生きながら葬られんとするを視ては、安閑たること能はざる也。

◎故星亨は近代稀れに見る政界の傑也。自由黨を手足の如くに動かして、政界を馳騁せり。伯板垣退助によつて生れたる自由黨は、天下の惡黨たる星によつて光彩を放てり。星の惡黨たる所は、即ち星の偉い所也。

◎河野も一體が惡黨たり得る素質を有すれども、惡黨たるには餘りに清廉也。彼れは惡黨に非ずして、感激の人也。感激の人たるが故に、他の煽動に乗せらるる事往々あり。彼れは煽動政治家なるが如くして、實は被煽動政治家たるなり。

◎彼れ、一たび伯大隈重信の知遇に感激して、進歩黨に入れり。而して、一躍進歩黨の重鎮となれり。夫れも唯重鎮也と云ふ迄にて、星の自由黨に於けるが如きに非ず。

彼れや將に將たるの器なるも、惜しいかな兵法を知らず。

◎神主の神前に落ちつき拂ふと、河野の政界を白眼に觀て落ちつき拂ふと、稍相似たるものあり。唯その咳拂の色の異なるのみ。一は無意味なるも、一は有意味也。彼れ、政界の縦斷を畫する、多く此の咳拂の裡よりす。

◎此の咳拂の色の黄なる時、夫の彈劾奉答文の芝居は仕組まれたり。餘りに政界の無爲に飽きたる彼れは、秋山定輔等にそゝのかされて何か一世を驚殺するやうな仕事をやつて見んと思ひたる也。形式的の彈劾案を提出して、人氣を博すべく議會にてワイワイと騒がんよりは、どうせ簡單に、最も有効にやつてのけんと思ひたる也。即ちそこが、怪物の怪物たる所以ならずんば非ず。

◎奉答文を起草せるは、彼れの女婿なる宮崎晴瀾也。一體晴瀾も面白い奴なればこそかゝる奉答文を書きたるなれ。それを尾崎が起草した杯とは、眞赤な嘘なり。

◎慙くして、河野は辛とありついた衆議院議長の位地を、棒に振りたる也。當時の新紙多くは筆を揃へて、當年の霸氣未だ衰へずと評せり。獨り呆氣にとられたるは議員

ばかり也。茲に於てか、彼れの存在は再び世に認められたり。

◎燃ゆる事の熾んにして、消ゆる事の速かなるは、藁火也。彼れは進歩黨を去つて、政界に雌伏す。藁灰の冷かなるが如く、静かなるが如し。然れども吹けば飛び、燃せば燃えんとす。彼れは胸裡に、極めて強き可燃性を包藏す。感激の人にして、被煽動的政治家たるは、是れが爲めなり。

◎果然、國民大會の、活劇は演せられたり。此の筋書を書き下したるは、彼れ自身には非ずして山田喜之助也。大竹貫一也。要するに、彼れは國民の義憤に擁せられ、是等の人々に煽動せられたる也。

◎兎に角、總ての大芝居を旨くやつてのける所は、道に彼れの偉い所也。世のヘッポコ政治家の企及し能はざる所也。頼まれても出来ざる藝當也。

◎吾人は、彼れの意氣を愛す。講和條約を不満としたる國民の意氣に感激して、國民大會的一幕を首尾よく演了せる勇氣を愛す。老人にして青年的活動を試みるもの、現代に於て唯彼れを推す。

◎今期議會に於ける内藤魯一の行動は、稍河野のやり口を偲ばしめざるに非ず。林有造の死せるが如き時に當りて、内藤の絶叫を聞く、痛快ならずんば非ず。然れども、河野の大と青年的活動なきを奈何。

◎新政黨組織に關して、彼れを促したるは澤來太郎也。彼れは三たび政界に復活せり。

◎彼れは花形役者に非ざるも、座長としては無からねばならぬ人物也。これ、彼れの怪中の怪にして、政界に潜勢力ある所以。

◎併し乍ら、吾人の彼れに對する尊敬は、憲政史上の一人物として、はた過去の功勞ある政治家として也。今後によくを期待せず。

◎彼れは禪に參し、基に淫すれども、新思想と新空氣とには風馬牛たり。これ彼れの青年的活動と政治的野心のあるにも拘らず、新時代の氣運に掉し、新時代の政界を奈何ともする能はざる所以也。

◎彼れは禪に參するの極、がらにも無き几帳面な事をやつて、自ら慰むるの滑稽を取す。机上の硯箱、書冊等の位置、一分一厘も違はぬやうにキチンと整頓し、苟も之

を亂すものあれば、叱咤雨の如く下る。主公の禱ゆるに苦痛を感ずるは、妻奴書生の輩なり。

◎客の座蒲團に座する事正しからざれば、彼れ又眉を擡む。爲めに、往訪して不快を感ぜざるは稀れ也。かゝる些事にまで、神経を勞する今日の廣中も亦憫笑に値せずとなさす。

◎彼れが政黨内閣の内務大臣の空望なりしが如く、彼れの手に頼りて新政黨の成る、或は空望なるやも測るべからず、知らず、彼れの這間に處する覺悟如何。(明治四二、五)

岡田良平論

◎一夜、東京高等商業學校に天火下る。人爲的の消防によりて、辛うじて全焼の不幸を免れたるも、滿都の人士之が爲に張膽飛目す。

◎而して、戰慄せるは、文部省ならずんば非ず。文部省は學閥に忠なるの極、赤門の繁昌策を畫して、高商を呪咀したるもの也。事實は兎も角、その精神に於て高商を燒

盡せずんば歇まざらんとするの概ありたるもの也。

◎天火下りて、文部省爲めに戰慄し、驚愕す。高商の氣焰天を衝いて、文部省の手を燒くに至りたれば也。焼餅焼くとして手を燒くもの、必ずしも田舎の老媪のみに限らざる也。之を以て、明治聖代の滑稽となす。

◎文部省に於て、高商壓迫に腐心せるものは、文部次官たる岡田良平其人也。良平の良平たらざるは、悪平の悪平たらざるが如き也。

◎良平は、静岡縣士族岡田良一郎の長男也。父は天保十年十月の出生にして、母ゑいは弘化元年六月の出生也。而して、ゑいは静岡縣平民竹山梅七郎の長女也。此の士族と平民の血をつき混せて生れたるものは、實に良平也。

◎彼れに三弟一妹あり。法學博士一木喜徳郎は慶應三年四月生にして、實に彼れの弟也。喜徳郎は手腕の必ずしも良平に優るに非ざるも、學識と才幹とに於て、實かに彼れに優れり。

◎妹きんは静岡縣人杉村七太郎に嫁し、明治十四年七月生の繩平と、同二十年一月生

の分平とは共に、彼れが小石川區原町の家庭にあり。

◎良平は元治元年七月の出生にして、夫人は明治七年七月の出生也。夫人は實に滋賀縣士族石黒務の二女也。

◎夫人にして現はるゝもの、鳩山春子あり、山脇房子あり、佐藤静子あり。然れども良平夫人に至つては、その名殆んど聞ゆるなし。恐らくは、平凡の夫人ならん。

◎平凡、時に非凡に勝る。彼れの蓄財に巧みにして、多くの貸家を有するを以て見れば、彼れの夫人、或は非凡の秘術を有するやも知るべからず。

◎小松原文相の夫人は賢夫人也。蓋し彼れが縣知事たりし時代より、小松原の名をして高からしめたるは、夫人の手腕に頼らすんば非ず。

◎今日の文部省に於ける小松原は、良平に操らるゝ人形の如き観なき能はず。曩に、假名遣を復舊して教育界を愚にしたる、偶ま彼れの蠻勇を見るべきも、之を斷行せしめたるの黒幕裡に、此の良平あるを忘るべからず。

◎良平は一個の野心家也。策士的官吏也。彼れはダンピラを振り廻して、小心翼翼として、俸給に維れ離れざらん事を憂ふる、氣骨なく、意氣地なき教育家を威嚇せずんば止まざる也。

◎彼れは明治二十年の文科大学の卒業生也。第一高等中學校教諭となり、文部省參事官となり、山口高等學校長となりて、茲に始めて文部の要職に就くを得たり。

◎文部省實業學務局長となりしは、彼れの名の多少世に知られたるの時也。夫れより文部省總務長官となり、宮内省御用掛となり、再び文部次官となり、貴族院議員の勅選せらるゝまで、彼れは坦々たる順境を踏み來れり。

◎明治四十年、出でて京都大學に總長たるや、彼れの毀譽は相半せり。良平思へらく、乃公出ですんば京大を奈何せんと。彼れの鼻高き事、晉に三尺のみにあらざりし也。然れども、彼れの豫想通りには行かざりし也。

◎彼れ文部次官を以てして、京大總長となれるの時、東大には元の文部大臣たりし濱尾新の總長たるあり。茲に於てか、彼れは野心家の本性を現はして、何かにつけて東大を出し抜き、東大を凌がんとせり。

◎其の元氣や愛すべきも、彼れは之が爲めに東大の反感を買へり。東大の法科大學長の穂積八束の如きは、最も彼れに嫌焉たりし一人也。

◎彼れや徳望に於て濱尾に若かず、學者たるに於て現京大總長たる理博菊池大麓に及ばず、力量に於ても亦到底お話にならざる也。

◎政友會内閣の斃るるや、彼れは三たび入りて、桂内閣の文部次官となれり。大臣小松原の下には、好個の次官たるやも知るべからず。されど、次官たるの才幹に於て、前次官たる澤柳政太郎に劣るなきを保せず。

◎澤柳も彼れと同じく高等學校長となり、文部の一局長となりて、遂に次官とはなれる也。年齒尙壯にして、古物たる中川元の如きを凌ぎ、上田萬年を脚下に踏みつけ、一躍して文部に次官たる澤柳も亦鈍骨には非ず。

◎次官たる經歷に於ては、文部省參事官をも勤めて、順次經のぼりたる良平は、事務的の頭腦ある、或は澤柳の上にあらん。健筆縦横の點に至つて、即ち澤柳に及ばず。

◎澤柳は筆でも飯の食へる男なれど、良平は役人ならでは飯が食へざるべし。學者と

しては、雙方ともいかさま也。

◎彼れ良平は俗才あるだけ、機嫌取りが上手也。彼れ、既に次官となりて、東大の御機嫌を取らざれば、文部の威信の行はれざるを知るや、何等かの好餌を與へて、之を手の中に丸めんとしたる也

◎棒引假名の排斥では、萬年一派の御機嫌をそこね、世間より愚弄されたる彼れは、何とかして信用のとり返しをせんと焦燥りたり。

◎急かば廻れ瀨田の長橋、急ぐによつて、彼れは失敗せり。その愚や笑ふに堪へたるも、その手段の悪辣なるに至つて、寧ろ憎むべくして憫むべきを見ず。

◎高商の專攻部を廢して、法科大學の一部に商科を置く事となしたるは、全く彼れの東大の御機嫌を取らんとしたる一策ならずんば非ず。

◎提灯の明るきを見て、足元の暗きに心付かざるは彼れ也。反對の聲の東大より起らんことは、恐らく彼れの豫期せざりし所ならん。

◎然るに、案外にも穂積等は反對せり。彼れ、之を聞かや、驚いて穂積を其の邸に訪

ひ、密談數刻の後始めて穂積を口説き落して、辛と胸を撫で下せり。是れ實に、法科大學の教授會を開くの前日なりける也。

◎雖て、教授會は開かれたり。穂積既に軟化したる以上は、他に一人の反對なかるべしと思ひきや、土方寧、戸水寛人の如き、高商專攻部を廢すべきの理由なきと、法科大學に不完全なる商科を設くるの不可なるを續述し、盛んに反對の氣焰を揚げたり。教授の多くは此の説を賛成するに至り、あはれや商科設置の議は、空しく一片の反古たらんとせり。

◎良平の不平、既に絶頂に達す。彼れ乃ち絶叫して曰く、商科を大學に置くは、全く東大の繁昌を望めば也。若し、之を高商に置かんか、彼等の暴慢や知るべく、遂に赤門と一ツ橋と相對峙して軋轢するに至らんを恐る。今にして、東商を壓迫せずんば、害を後日に殘さんと。

◎一喝忽ち功を奏して、教授中げにもと頭を傾くるもの尠からず。記名投票によつて可否を決するに至りて、大勢は既に定まれり。僅々數票の差を以て、反對派の敗に歸せり。

◎松崎藏之助は、細君の前に頭の上らぬ男也。彼れ病と稱して東商の校長を辭し、改めて法科大學の教授に任せられ、商科最高の椅子を與ふべく豫定されたり。吾人は彼れの面上に唾するも猶足らざる也。

◎藏之助を排斥して、一時沈黙せる東商の學生は、專攻部廢止の官報を見るや、憤然として蹴起せり。眞野専門學務局長は東商校長を兼ね、彼れ良平の如きは極力壓迫せんとしたるにも拘らず、東商の反抗益々盛んにして、神戸高等商業學校すら之に呼應するに至れり。茲に於て、文部の威信全く地を拂へり。彼れ良平たるもの正に慚死すべき也。

◎然るにも拘らず、彼れは此の間にありて猶惡辣手段を弄せんとす。小松原の強がり

を云ふも、全く之が爲めならずんば非ず。

◎内には眞野の如く、硬骨にして彼れの願使に甘んせざるものあり。外には政治家の起つあり。實業家の反對あり。彼れや遂に策の施すべきなきに至れり。

◎時に梅雨濛々として到り、氣候頭腦に可ならざるものあり。知らず、彼れの頭腦に異状なきや奈何。(明治四二、五)

堀田正養論

◎梅雨濛々、連日晴を見ず。庭隅の古靴魔の如く白毛を生じ、棚上の達磨尻正に腐るべう覺ゆ。

◎無聊の餘、碁局に對して子を投ず。黑白參差、石韻丁々、又亮々たり。心耳爲めに澄み、恍として俗界の事を忘す。

◎時に天外聲あり、「子堀田正養厥起す」と「正養? 正養? ハハア子堀田、尻も腐れず起つたか」と、遂に犬桂馬の大飛躍を試む。局面將に轉せんぞす。

◎堀田の起つ、必ずや大桂馬にして、政界に活動を試みんと欲するもの、局面利あらざれば雌伏して風雲を觀望し、時至れば呼吸を合せて厥起す。彼れや碁碁に非ずして。有段の士也。

◎貴族院は碁碁の本陣にして、閑つぶしに碁局に對するに似たり。衆議院の輿望を負うて立ち、之によりて飯を食はんとするの眞劔に若かざる也。併し乍ら、碁碁石垣積みの徒、時に無意識の妙手を打たすとも限らず。堀田の有段にして時に死命を制せらるゝは、全く之が爲ならずんば非ず。

◎堀田は華胄には珍しき野心家也。尙友會の創立者也。研究會の肝煎役也。西園寺内閣の遞信大臣となりて鼻うごめかしたる男也。然るにも拘らず、彼れは卒然として諷られたり。世、尙友會及び研究會の態度を怪み、堀田既に老いて勢望を失へるかど嘲笑せり。

◎彼れは有段にして碁碁の輩に致さる。心大に平かならざるものあり。然れども、彼れは後日の飛躍を試みんが爲に、暫く暗涙を飲み、陰忍して時機の至るを待てり。果せるかな、尙友會及び研究會中、その幹部に對して不平を抱く者續出し、恰も古靴の白毛の如く目に付くに至れり。茲に於てか、馬鹿に非ざる彼れは、遂に銀髯を撫し、猛然として厥起せる也。

◎彼れは彼れの面目上、世間體もある事なれば、普通的手段にては手ぬるしどや思ひけん。彼れは研尙二會に對し、一篇の通告をなすと同時に、左の宣言書を發表せり。

研究会及び尙友會が、本年四月十七日予を除名したるの理由判明を缺けるに因り、予は之に服従の職務なきものと認め、其の通知狀を返附すると同時に的確の理由を指示すべく兩會に要求したり。然るに、兩會は既に八旬の久しきに及ぶも何等の理由を指示せず在茲今日に至り、是が爲め予の態度に對し、疑惑を挟むものあるを以て、茲に予の立脚地を宣明す。予は研究会及び尙友會が創立の初に當り、聲言せる趣旨を遵守踐行して毫も渝るところ無し、即ち天壤無窮の賈詐を奉戴し、宇内冠絶の國體を擁護し、而して國家の隆昌と人民の慶福とは一に憲法に遵由して之を謀議計畫し、愛國殉公の心を勵して和衷協同の美を發揮するを以て、予の目的と爲す。

苟も憲法の大義を表明し護持せんと欲せば朋黨比周の弊を去り、公平中立の意見を定め、全力を傾倒して之に盡瘁すべきなり。想ふに憲法施行以來、帝國は日清日露の二大戦役を経て世界列強の伍伴に入り國威の宣揚顯著なると共に、上下臣民の任務益々重大となれり。故に斯の任務を全うせんと欲せば、兩院制度の精神を護ることなく、憲法の運用を圓滑巧妙ならしめん爲め、貴衆兩院の派たり黨たるを問はず和衷協同の實を擧ぐべきなり。予は今後斯の方針に據りて斯の目的を貫徹せしめん爲め、別に研究会及び尙友會固有の主義を發揮せんと欲す。

◎これ、實に本月六日の事也。彼れが、「朋黨比周の弊を去らん」と揚言するは、極め

て可。而して、彼れが最後に「別に研究会及び尙友會固有の主義を發揮せん」と負け惜みを云ふに至つては、除名されたる彼れの心中憐むに堪へたるものなくんば非ず。

◎逃げ乍ら、後を顧みて吠ゆるは瘦犬の事也。喪家の殘肴に戀々たるは愚の極也。既に研尙二會を除名され、又自ら奮つて研尙二會を脱す。創立者たる彼れが當時の精神を失したるもの、本來の主義の發揮も糸瓜もあつたものに非ざる也。宜しく彼れが理想の新政黨を樹立せんとならば、全く舊套を蟬脱し、新主義新政綱を標榜するの政黨をこそ望ましかれ、舊屋を捨つるに戀々たるの未練はあるべからざる也。

◎貴族院は政黨らしきものあれども、政黨は無き也。朋黨はあれども、公黨は無き也。かの幸俱樂部の如き、木曜會の如き、尙友會の如き、研究会の如き、談話會の如き、皆朋黨ならずんば非ず。

◎朋黨は彼れの最も厭ふ所なるは、その宣言によりて明か也。まさか彼れは、研究会を以て政黨なりと信する程に愚ならざるべし。然れども、多少未練のある所を以て見れば、或は爾か信じたるやも知れず。成程、貴族院の團體中にて最も政黨の色彩を帯

びたるは、研究会なるべし。さはれ、之を政黨なり、公黨なりと云はんには、餘りに朋黨若くは私黨の類似點多きを奈何。

◎研究会の、近時山縣系のものと同化せるは蔽ふべからざる事實なり。而して、堀田の除名は、明かに此の事實を證明す。彼れにして、山縣系に同化せんか、恐らくは除名せらるゝ事なかりしならん。

◎彼れは閣僚たりし緣故上、或は西園寺系の客將たるを辭するものに非ざるべきも、到底山縣系のものたる能はず。彼れは事毎に貴族院に壓迫を加ふる山縣系を厭ふこと蛇蝎の如ければ也。

◎子爵議員は、現時に於ける貴族院の花形役者也。而して、野心家のおそろひ也。中に嶄然として頭角を現はす、彼れ及び秋元興朝也。秋元は政友會幹部の一員にして、談話會の頭領なり。

◎秋元は政治的經歷に於て、彼れに比して一日の短あり。然れども、子爵議員中に重きをなし、隱然勢力を振ふに於て敢て彼れの下に非ず。蓋し、堀田は辣腕家也。秋元は敏腕家也。

◎彼れは行政官として知られ、研究会の一策士として同族間に怖れられたるのみ。政界の人となりしは、近年の事に屬す。秋元も亦然り。二三年前までは僅かに相模狂、風流人、教育家として、その存在を認められたるに過ぎざりき。然るに、談話會を組織するに及びて、秋元は政界に有力なる一人となれり。これ、恰も彼れが遞相となりて名聲頓に揚れるに等し。

◎彼れと秋元とは、必ずしも政見の同じきものあるに非ざるも、山縣系ならざるに於ては一也。彼れ等は山縣系にとりては、實に眉間の贅疣たる也。

◎彼れ既に研究会を去る、一の岡部長職あるも亦、子爵議員を如何ともすべからず。貴族院は、今や改革派の爆裂彈上に置かれたり。

◎貴族院の改革派を以て目すべきものに、少壯有爲の伯大木遠吉あり。伯柳原義光あり。談話會と互に氣脈を通じて、政界縦斷を畫するの觀あり。之に更に、辣腕なる彼れを加ふ。天下の事、必ずしも山縣系を待ちて談すべしとも限らず。

◎除名によりて男振を上げたるもの、前に犬養毅あり。後に彼れあり。而も犬養の衆議院の一角に據れるに反し、彼れは貴族院を縦斷せんとするの概あり。近來の痛快事ならずんば非ず。

◎彼れの旗揚げを聞くや、松平忠順研究会を出で、五島盛光尙友會を脱しぬ。而して今後彼等と步趨を共にせんとする者三十餘名の多きに達すべしと云ふ。これ確かに研究会の一大打撃にして、藩閥派の敗北也。

◎現時、貴族院の藩閥黨(山縣系)を以て目すべきは、研尙二會及び幸俱樂部也。而して、之と反對側に立ちて、非藩閥を標榜するは、木曜會、土曜會、扶桑會、及び談話會也。

◎非藩閥の氣餒揚らざるに、藩閥の鼻息頗る荒きものあり。貴族院は殆んど彼等が壓迫の下に呻吟しつゝありし也。然るに、今や堀田の蹶起するあり。談話會の奮起するあり。その形勢頓に變せんをす。これ、實に貴族院の爲に喜ぶ可き現象として、多大の注目を値する所以。

◎彼れは門地に於て、學識に於て、素より柳原に及ばず。貫祿に於て必ずしも岡部の上に出でず。宏量に於て秋元に若かざるも、一種の主張を持し、辛辣の手腕を有するに於て、華胄界中彼れの右に出づる者無し。

◎彼れは從來、伯子男の選舉に際しては、自派の頭數を増加するに於て、有らゆる手段と術數とを弄して憚らざりき。されば、彼れは時に華胄界の惡黨を以て目され、貴族院の指彈する處となりき。彼れは斯くの如く非難の多きにも拘らず、出でて遞相となるや同族の瞻仰する所となり、一たび手に唾して起つや藩閥派狼狽の色あり。彼れも亦華胄界の人物にして、勢力家たるを失はず。

◎政界の首領は、或意味に於て偉大なる惡黨たらざるべからず。彼れは、この點に於て、稍首領たるの資格あり。唯、從來の如く朋黨を樹立して以て得たりとするが如きは、彼れの爲に採らざる所也。

◎眞に貴族院を刷新し、政界に覇を稱せんとならば、宜しく公黨的行動を取らざるべからず。吾人は既に貴族院中に蠢々たる私黨の蠕動に厭きたり。願くは青嵐千里の活

動を見んと欲す。彼れたるもの、正に大に振ふ所無かるべからず。(四二、七、八)

平田と小松原

一

◎桂内閣の頭顱燦として日星の如きものなく、はた芙蓉千古の雪の如きなしと雖も、首相桂太郎の才槌頭の異彩を放つあり。又、薄月の如き卵頭を陸相寺内正毅に見、電氣燈の如き額を法相岡部長職に見る。之を光輝の一對として番附く、必しも振はざるに非ざる也。

◎更に花形の一對を求むれば、遞相後藤新平と農相大浦兼武あり。互に功名を博せんとし、權勢を張らんとして競ふ。而して、その競ふ所に嫉視と反目とを醸す。後藤は大浦を呼ぶに蝮の兼を以てし、大浦は後藤を笑ふに穴だらけの大風呂敷を以てす。

◎蠻勇の一對は、正に内相平田東助と文相小松原英太郎と也。此の二者は光輝あるを以て議場を眩するに非ず、花形役者たるを以て人目を惹くに非ず、唯何となく不人氣

なるに於て相似たり。平田の細心にして小刀を弄すると、小松原の無謀にして鉈を揮ふとの差ある耳。

◎寺内と岡部とは相反射するものにして、内閣の風雲を捲くものに非ず。蝮の兼と穴だらけの大風呂敷に至つては、包まんとすれば逸せんとし、噛まんとすれば搏たんとして軋轢す。内閣の動搖或は之によりて起らんと期待せられしに、阿里山問題と製材所問題との暗闘は暗闘にして終れり。然るに事端は意外の邊より發し、英太が鉈の過ちに内閣の一角に龜裂を生せんとせり。東助の小刀は未だ鉈の危険なしと雖も、その注意人物たるに於ては小松原の下に在るものに非ず。

◎彼れ英太の鉈を試みたるの最初は、例の假名遣問題の解決にして、復舊を斷行せる事是れ也。而して次は、高商專攻部廢止及び商大設立問題也。前者は教育家に愚弄せられしに止まりしも、後者に至りては高商學生の反抗に會ひ、一轉して政治問題たらんとして文相の椅子を危からしめ、引いて内閣動搖の端を發かんとせり。

二

◎山縣系は現内閣に於て鼎立す。後者は警視總監龜井英三郎、男波多野敬直等と共に、子清浦奎吾を黨首とする所謂清浦派に屬し、大浦の一派は之を躍起組と云ひ、關清英、足立綱之等を抱擁して勢威を張る。而して、平田及び小松原は、山縣伊三郎、安廣伴一郎等と共に直參黨也。

◎小松原は、平田の如く公山縣の縁戚に非ざるも、清浦派に屬せず、躍起組に加はらず。桂と共に黨外に立つを以て見れば、之を假に直參黨となす、敢て不可ならざるを覺ゆ。これ、彼れの椅子の容易に動かざる所以ならずんば非ず。

◎平田は巨然として内閣に重きを爲す。彼れは後藤の如く、大浦の如く、多く人目を惹かざるも、公山縣と縁戚たるの關係に於て、桂の片腕たるに於て、准首相の位置を占む。

◎第二次桂内閣の成る、必しも大浦ありたるが爲に非ず、寺内ありたるが爲に非ず、全く一平田ありたるが爲也。平田に換ふるに清浦を以てす、或は公山縣の難んする所なりしやも測るべからず。

◎岡部は貴族院操縦の策略よりして迎へられ、後藤は現代の寵兒なるにも拘らず躍起運動を試みたるによりて入閣せるを見れば、思半ばに過ぐるものあらん。

◎かゝる内情より觀察して、吾人は平田及び小松原を以て、少くとも現内閣の勢力家として評價する所以。

三

◎平田は東北の産にして、小松原は中國の出也。平田は貧乏士族の伴、小松原は鰻屋の小僧也。

◎鰻屋の小僧の鰻登りに登りて出世したる、小松原を措いて他に求むべからず。蓋し、彼れは風雲兒也。

◎彼れの年少にして『評論新聞』に才筆を揮ふや、社會の耳目は殆んど彼れの一身に集れり。而して、彼れは遂に政府者の忌憚に觸れて鐵窓の下に繋がれ、文名の愈々高さものありき。

◎當時操觚界の雄なるもの、成島柳北あり、末廣鐵腸あり、福地櫻痴あり。彼れの柳

北等に伍して、敢てひけを取らざりしを以て見れば、一代の秀才たるには相違なかりし也。

◎彼れの才は早熟にして、器は晩成也。彼れは斯の如く早くより文名を馳せ、縣知事にして鐵中の錚々たるものと認められ、而して老來漸く文相の一椅子を得てしがみつ。即ち、お世辭にも晩成とは申す也。

◎平田は小松原に反して、平凡にして多奇なき男也。彼れは子伊東巳代治の如く小役人より身を起したるは違へど、矢張巧みに官海を游泳して、いつの間にか大臣まで漕ぎ付けたる也。

◎彼れは經歷の然らしむる所か、身體の虛弱なるに因るか、時に小刀を弄するも、大銃を揮はず。所謂策士肌の君子人也。

◎伊東は潑刺として大飛躍を試みずんば歇まざる男也。伊東を鯉とすれば、平田は水に従つて悠游自適するの金魚ならずんば非ず。小松原に至つては得體の知れぬ鯰也。

四

◎貫目より云へば、金魚と鯰との比喻或は不倫ならんも、行動より見る必ずしも不可ならず。その貫目は無論、平田は小松原の上であり、平田は大臣としては既に本場所を踏み來れる也。

◎然れども、循吏なるの點に於て、兩者殆んど軒輊なし。平田を文相となすも可、小松原を内相となすも亦可。兎に角融通の利く人物也。

◎學殖に至りては、小松原は平田に及ばず。平田の法學博士なるが故に、しか云ふには非ざる也。

◎前内閣の首班たる侯西園寺の佛蘭西學派なるに、現内閣の侯桂は獨逸學派也。前内閣の不謹慎なるに比して、現内閣は比較的ぢみち也。

◎平田及び小松原も亦獨逸學派。この一事、桂の信頼を値す。

五

◎小松原は知事位でひつ込んで居れば、小松原の虛名と偉さの減せざるべきに、彼れは文相になりたるが爲に大に味噌をつけたり。彼れの味噌を付けたるは、桂の威を笠

に着て専擅を敢てし、餘りに功を急ぎたるに職由せずんばあらず。

◎人間は力量以上の事はやれるものに非ず、假名遣問題にて手古摺りたる彼れは、直轄學校職員の内職禁止の訓令にても亦散々に愚弄されぬ。實行されざる百の訓令は、ピリツと利目のある一の鐵拳に若かず。

◎世に教育家程かつえて、意氣地なきは無し。その意氣地なき教育家にすら愚弄されざるべからざる小松原も亦老いたるかな。

◎平田は産業組合の鼓吹者也、報徳宗の信徒也。平田の内相たるに至りて、報徳宗は天下を風靡す。

◎西南の僻地より東北の寒村の青年等皆競うて、報徳會を創立す。然れども、不景氣は依然として不景氣也。

◎近時、彼れは社會主義者に高壓を加へ、社會主義を絶滅せんとするに孜々たり。而して他方に於ては文藝の取締を嚴にし、黨齋を併せて艾除せん。君子人たる彼れの政策としては、殆んど常識を逸するの觀なくんばあらず。

◎然れども、前内閣瓦解の一因は、社會主義取締に手ぬるかりしとにありと云はるるを以て見れば、義理にも手酷くやらねばならぬ也。

◎彼れは、之までの内相の如く薄ぼんやりには非ずして、社會主義の原理に精通し、獨逸に於て社會黨に對して執りし、執れる政策を熟知せる也。茲に於てか、ビスマークの政策を一つやつて見んと思ひしやも知れず。何れにせよ、赤兒の如き社會主義者の手を振るとしては、餘りに仰山なり。

◎夫れでも、彼れは他面に於て報徳宗を鼓吹し、社會改善に意あるは多少衰むべし。されど、社會主義者を追窮し、文藝を迫害して以て得たりと思ふは、彼れが理想政策の誤解に基く。

◎村長や巡查のやる仕事をやるのみが、内相の能事にもあらざるべし。彼れたるもの、宜しく三思せざるべからず。

◎内相の椅子は、由來功名を成すの地位にあり。男平田東助たるもの、夫れ奮勵一番せよ。(明治四二・八)

大浦兼武論

◎秋風都門に入りて、政界漸く動かんとす。頭の禿と白と、髭のカイゼルと天神と、私語し、目語し、密語して何事をか成し、何物にか有付かんとするの状、天下の見ものならずんば非ず。

◎臺閣に怪物あり、蝮の兼と云ふ。白眼にして、政界の暗闘を冷笑す、されば、胸裡何等かの計あるに似たり。

◎蓋し、蝮の兼は尊稱に非ずして、悪名也。まことは大浦兼武と申し、男爵にておはす也。自らは金竹と號す。

◎金竹の雅號、俗にして雅なるを見ず。音讀して耳之を厭ふ。蝮の兼の迢かに彼れの性格を想望せしむるの、非凡にして薄氣味悪きに若かず。

◎蝮の兼の名、京童も尙畏怖す。然れども、未だ泣く兒の泣を止むるに至らざるは、

鬼上官の威風なきに由らずんば非ず。

◎巡查の佩劍のがちやくと過ぎる時、夜狗頻りに吠え、髯面して目をむき出す時、兒童必ずワアと泣く也。兒童を泣かしむるに於て、警官の權威なるものを認めずんば非ず。

◎大浦は、もと牛込警察署の一選卒也。選卒とは註する迄もなく、今の巡查の事也。警官也。此の兒童にのみ最大の權威ありし警官の出世せるは、今日の男大浦也。

◎彼れ馬車にして、神樂坂を驅る時、常に當時を追懐して苦笑す。彼れの苦笑する時、彼れの眼前に髣髴するは、一個桎木棒を提げたる選卒なりと云ふ。

◎蝮の兼の蝮の兼の本性を發揮せるは、警視總監たりし時ならずんば非ず。

◎吏に廉吏あり、循吏あり、酷吏あり。彼れは確かに酷吏と目されたる一人也。然れども、彼れは實際酷吏には非ざるべきも、随分ひどい事をやりたる男也。素より警視總監は憎まれ役、良吏などと稱せらるゝ事は、未來永劫ある可からず。

◎大浦に次で警視總監たるもの、關清英あり、足立綱之あり。而も、その手腕の辛辣

なる點に於て、部下を愛撫する點に於て、到底大浦に及ばず。現總監龜井英三郎は、その手腕に於て、多少の惡評あるに於て、大浦を忍ばしむるもの無さに非ず。唯彼れの幼稚なるのみ。

◎龜井の政界に勢力を扶植するの時、始めて大浦と同日に談ずべし。龜井は赤門出身の法學士、學問の點に於て、大浦の無學に比すべからざるや勿論也。

◎大浦はその人間學、官吏學を修めたる點に於て、總ての臺閣諸公に卓越す。これ、彼れの行政事務に練達し、勤勉にして綿密なる所以。

二

◎彼れ、征韓論に際して選卒を罷めて郷國に歸臥し、臺灣征討の際出でて義勇軍に従ひ、後警視廳に入つて警官となり、西南の役には警視隊として官軍に加はり、昇進して陸軍歩兵中尉とはなれり。當時の彼れとしては、有り難く頂戴したる肩書なるべきも、今日に至つては恰も蝸牛の殻の如き観なくんば非ず。

◎地方の警部長より進んで警保局主事となり、縣知事となり、警視總監となるに及ん

で、彼れの雷名既に儕輩を壓す。その昔牛込の兒童を泣かしめたるもの、遂に大人を畏怖せしむるに至れる也。

◎彼れは斯くして官吏學を修業し、而して合格せり。彼れの今日の地位に昇れるは、全く合格の累加也。

◎下級より合格して昇進せる彼れは、未だ失意の苦き經驗を有せず。さればにや、彼れは蚊の兼と稱せらるゝにも拘らず温顔を以て人に接し、莞爾として薩音を弄する所、思つた程恐い爺さんに非ず。

◎然れども、彼れの肚裡には一個の勇猛心を藏す。此の心、時ありて激測す。

◎曾て熊本縣知事たるや、國權黨に加擔して、自由黨を壓迫す。その壓迫するや、普通の手段に依らずして、縦横の奇策を弄し、根こそぎにせずんば歇まざりき。敵としては、實に畏るべき人物也。

◎彼れ、宮城縣知事に轉せられ、辭令を手にし乍ら、頭を掉りて任に赴かず。遂に數日にして罷められたり。これ、大浦にして始めて成し得るの藝當也。一寸面白い嫉ね

方也。

◎敵をして屈服せしめずんば歇まざるの勇猛心は、自我を發揮するに於て、厭くまでも頑張りて頑張り抜かすんば歇まず。彼れの強きは此處也。彼れの悪黨の如く誤解せらるゝも此處也。

◎彼れは悪黨の如くにして、實は左程の悪黨に非ず。古武士的根性の男也。昔は兎も角、今は餘り女と遊ぶ事をせぬ士人也。先づは品行方正の蠻カラ也。

三

◎大浦は蠻カラにして、蠻勇也。薩州出身の蠻勇は敢て奇とするに足らざれども、大浦に至つては蠻勇の雄なるもの也。

◎曩に蠻勇の名を博したるものに、革内將軍高島勲之助あり。彼れは一武辨にして、政治の何物たるを知らず。唯徒らに野心ありて手腕は之に伴はず。蛙の足を長くして大飛躍を試みるが如きのみ、蠻勇の元祖たるべきも、未だ其の雄たるものに非ず。

◎彼れ大浦の桂内閣に入りて遞信大臣の椅子に凭れる時、滿都の人心を寒からしめた

る焼打事件なるものあり。日比谷公園須臾にして修羅の巷と化す。而して此の暴動を挑發せしめたる張本人は、彼れ大浦兼武たりし也。

◎彼れの農商務大臣となるや、四十五年に開かるべき大博覽會の無延期を何人に告げずして擅行せり。之が爲に物論囂々たるも、彼れ泰然として動せず。第二十五議會の大問題たるべかりしを、旨く行つてのけたる所に非凡の手腕を見る。

◎彼れの採るべきは、不退轉の勇猛と健闘の精神と也。これ、蠻勇政治家の目ある所にか。

◎彼れは現内閣に於ては、決して重鎮と云ふべからず。その閣議に於て男後藤と角逐する位が愛嬌也。小松原は暗に大浦に賛し、子寺内は後藤を助け、子平田は黙して云はず、侯桂の採決するに及んで、後藤の説行はる。蓋し、後藤と桂とは臺灣以來聊か肝膽の相照す所ある也。

◎後藤の今日あるは黄金の力也。新聞雜誌記者籠絡術の巧みなるに因る也。大浦は然らず。彼れに散すべき黄金なき也。振り廻すのはサーベル位のもの也。彼れの素寒貧

と無學とを以てして、今日の地位と名聲とを得たるは、薩門出身にして官吏學に合格せるの結果也。

◎黄金散じ盡せば、後藤の身邊或は秋風落葉の觀を呈するやも測られざるに、大浦は隠然たる潛勢力を有す。今後の官僚系を統率する者、恐らくは彼れならん乎。

四

◎大浦は趣味を有せず。金竹の號あれども、詩歌を賦せず、紙絹を汚さず。偶ま用向に餘儀なくされて文字を書するも、鞆組文字を縦書せしが如く、何人とも雖も讀むを難んず。

◎伯大隈は絶えて筆を取らず、老獺にして賢也、大浦は正直也。拙筆揮ふ。

◎彼れの趣味なく、道樂なく質素なるは、下級官吏より出世したるに因る也。新思想に觸れざるは、無學なるがため也。併し、河島醇の如く間抜けざるは、無學の賜なるやも知るべからず。

◎若し云ふべくんば、彼れの唯一の道樂は政治道樂也。朝暮政治の爲に心力を勞す。

彼れ午睡するの時、夢は未來の大政黨の總裁にして、内閣總理大臣たるに有らん。

◎彼れは其の野心あればにや、善く士を招致し、愛撫す。警視總監時代の如きは、巡查の末輩に至るまで愛護し、彼等をして感激せしめし事一再ならず。武徳會長として、此の方面に勢力あるは全く之が爲ならずんば非ず。

◎彼れは大臣となりてより、更に大に心を用ひて、人心の收攬に努め、百方策を講ずる者の如し。官僚系に於ける躍起組の領袖としては、正にしか有るべき事也。

◎世人は彼れを惡罵するに、『官僚派の急先鋒にして、立憲制度の眞意義を解する能力なき者』となすも、彼れは夫れ程の頑固黨には非ず。蠻カラにして、蠻勇の雄たりとなすは、邊飾を修せずして、勇猛果斷を敢てするが故のみ。

◎併し乍ら、彼れは到底大政治家たるの大器には非ず。未來の首相たらんには、なほ一層の修養と、天下の俊髦を顧問とするを要す。

◎彼れの秘書官は堀貞と云ひ、彼れの女婿也、公伊藤に於ける古谷久綱の如く、彼れの秘書官には調法な人物也。

◎彼れが農商務省に拔擢せる押川則吉、下岡忠治、上山滿之進の輩、人材は人材なるも、彼れの爪牙となさんには未だ餘りに小也。

◎彼れ若し、近時の政界の混亂に乗じて一旗幟を樹てんとならば、宜しく犬養、大石、河野、島田の徒を糾合するの雅量なかるべからず。後藤虐めのみが能事に非あらざる可し。(明治四二・九)

薩派の人物

◎今朝の秋、薩派將に起たんとすと傳へらる。而して、新聞も亦筆を揃へて、さつぱりと起たん事を望めり。處が、今日に至つても薩派り動かざる也。

◎併し、起つには起つても、手足輒く動かざる乎。或は手足動きても、肝腎の腰が利かざる乎。由來統一なき薩派の事とて、這般の消息は薩張り解らざる也。

◎然れども思ふ、薩派未だ耄碌せず。一時は中風に罹りて、命危かりしかども、今は恢復して、全身の痲痺を見ず。長閥の徒らに肥大して胃腑漸く衰へ、時に病魔に犯さるゝなきを保せざるに反し、瘦身鶴骨の薩派、近時新空氣を呼吸して、肢體いよく健ならんとす。

◎長閥ありて、茲に薩派あり。之を臺閣政治に於ける、二大勢力となす。而して、此二大勢力の一消一長は、臺閣政治の上に、多種多様な色彩を施す。

◎明治維新は薩長の聯合協力の下に遂行せられ、而して憲法は發布せられたり。以後、日本の憲法政治は薩長の軋轢によりて、幾多の波瀾を捲けり。議會の幾解散の如き、官民の軋轢に因すと云はんよりは、寧ろ薩長の暗闘と觀るを可とす。夫の政黨の如きは、この二大勢力に操縦せらるゝ操り人形に過ぎざれば也。

◎薩長兩派の一顰一笑は、直ちに政黨の人氣に影響す。政友會は長閥に縋りて、今日の盛大を贏ち得たり。薩派立つと聞いて、大同俱樂部や進歩黨の一角の色めきたるも、無理ならぬ事ぞかし。

◎其のさつぱりと起つか、薩張り動かざるかは疑問なるも、この際、薩派の人物を評

論する、多少の興味なしとせず。これ本題を掲ぐる所以。

二

◎薩派中、長閑に快からずして雌伏せるもの二。曰く、革丙將軍高島新之助、曰く、鶴堂將軍山本權兵衛、是れ也。

◎子高島は陸軍を代表し、伯山本は海軍を代表し、共に政界に於ける薩派の重鎮也。而して、二者何れも現下の政界に對して、火の如き野心を有す。

◎長閑の公山縣と肩を並べて下らす、薩派をして重からしめたるは侯西郷也。大西郷の歿後、侯西郷ありて、薩派は政界の勢力を失墜せざりき。然るに、侯西郷逝いて、公山縣、公伊藤、侯井上と共に元老の名を存するもの、纔に公大山と侯松方ある耳。

◎大山は一個の武辨也。松方は長閑に好く、薩派に惡からざるも、殆んど無勢力也。元老としての箔を剥落せば、今や薩派の人物として論すべき價值あるものに非ず。彼

れは、政界の屍臘なれば也。◎この間、山縣系より隱然たる一敵國を以て目せらるゝは、高島と山本と也。彼等は

山縣系環視の下にありて、豪壯の氣を吐き、政界に雷鳴をなす。

◎山本は才氣横溢し、高島は蠻骨稜々たり。山本の事に當るや、輕車を坦道に驅るが如く操縦自在にして、一の澁滯を見ず、綽々として餘裕あり。高島の駭起するや、驛馬に鞭つが如く叱咤風生す。

◎山本は盤根錯節に會つて通じ、高島は衝突して窮す。雌伏して徐ろに政機の轉變を觀じ、風雲を靜視するものは山本也。窮餘百方の策を講じ、強ひて起たと焦燥るものは高島也。

◎高島は叛骨あり。この點に於て、彼れは長の子三浦に酷似す。新之助と梧樓、これ舊式の政治家にして、叛骨あるもの。然れども、梧樓は今や政界に意なし。

◎高島の老後の思出に起たんとしたること、一再ならず。而も、時運は彼れに非にして、政權は輒く落下し來らず。加ふるに、長閑の監視嚴にして乗するの機なく、糧道既に絶たれて氣息奄々、穴中に潛める墓の如く徒らに眼を光らす耳。

◎革丙將軍の近狀、斯の如しとすれば、薩派の爲に萬丈の光焰を揚ぐるものは、鶴堂

將軍權兵衛ならざるべからず。

三

◎今の中將上村と共に薩軍に投じ、大西郷に其の不心得を諭して歸還せしめられたるは權兵衛の少時也。彼れは血あり涙あり、霸氣あるの異材也。この異材を拔擢して海軍の用に供したるは、當時の海軍卿川村純義也。

◎明治十年より二十四年に至る迄、彼れは平凡なる艦隊生活を送りて、些の鋒鏘を露はさず。大臣權兵衛にも非ず、矢八にはじくられる種蒔權兵衛にも非ず、唯の權兵衛なりし也。夫れが、二十四年に大佐に昇進して海軍省に入り、仁禮景範の下に大臣官房主事となり、次で西郷從道の下に同官たるや、權兵衛の名は漸く儕輩の恐るゝ所となれり。

◎侯西郷は器局大にして、よく異材權兵衛の材幹を活用し、彼れの抱負を實行せしめられたれば、渺たる一大佐の身を以て己れの爲さんと欲する處を擅に遂行せり。二十八年少將に昇進して、軍務局長の椅子に凭るや、既に權兵衛大臣の稱あり、事實上の海軍

大臣を以て目せられたりき。權兵衛は夫れ程の辣腕家也。

◎隈板内閣土崩瓦解して、三十一年十月山縣内閣は組織されたり。茲に始めて、任海軍大臣、海軍中將 山本權兵衛

の名を閣員中に見る。評判の權兵衛大臣は本當の大臣權兵衛とはなれる也。而して侯西郷は内務大臣、伯樺山は文部大臣となり、帝國海軍の實權は全く山本の掌中に握らるるに至れり。中將柴山矢八の遺憾や察すべく、種蒔の得意や想ふべき也。

四

◎權兵衛と覇を争はんとするは、申すまでもなく矢八也。されど、矢八は矢張野心餘りありて重望なし。その以前にありてこそ、權兵衛と對等の角力も取れたれ。今は即ち駄目也。

◎重望を以てすれば、高島と名を等しうせるものに伯樺山あり。日露戦役に於て名聲頓に揚りたる將軍黒木、東郷、伊東あれども、大山の如く純粹の軍人肌にして、政治家たり得べくも非ず。樺山は高島の意氣なく、貨殖に熱中して他を顧みず。

◎既に、樺山柴山一派振はずとすれば、政界の薩派は山本の専有たらざるべからず。他に、上村、伊集院、日高の徒あるも、政界に驥足を伸し得べしと思はれず。伊集院の一たび海軍大臣に擬せられたるを以て、未來の海軍大臣となすものあれど、彼れに政治的材幹の缺くるあるを奈何。

◎現海軍大臣齋藤實を始め、男上原(勇作)、加藤(友三郎)、島村(速雄)、出羽(重遠)、山内(萬壽治)等は、鹿兒島人にあらざるも、准薩派の人材と云ふを妨げず。島村は將來有望の人物にして、上原は稍大臣の器あり。出羽は海軍部内唯一の經濟通にして、齋藤の軍政通なると相對して、双壁と稱せらる。就中、野心満々たるものを山内となす。◎男伊地知は薩派中唯一の策士にして、革丙と鶴堂との楔子を以て自ら任す。權兵衛未だ起たざるに、早く既に薩派の活動を云爲す、煙の此の邊より出づるやも知るべからず。

五

◎山内は齋藤と同期の練習生にして、而も權兵衛のお氣に入り也。山内は拔擢せられて英國留學を命せられ、アームストロング會社に於て見學し、後埃國のポラ砲術學校に轉じて射撃の術を學び、再びアームストロング會社に歸りて製艦術を研究せる男なり。

◎彼れは權兵衛の腰巾着也。ポケット也。アームストロング會社と一種の關係を結ばしめたる仲介人也。權兵衛の富を作さしむると同時に、己れの倉も建てたる利口者也。彼れと權兵衛とは切つても切れぬ惡縁(?)あり。獨り、軍人にして錢を愛する、樺山のみを責むべからず。

◎されば、彼等は樺山の如く金庫番に甘んぜずして、政治的大野心を有す。夫の惡縁を散じて、政界縦斷の計に出でんとするが如き、樺山の夢想し能はざる所ならん。

◎齋藤は、外温厚にして着實なれども、中々食へた代物に非ず。伊集院の好個の武人なるに比して、齋藤は政治家の素質を有す。近時、山内は何事をか成す所あらんとし、巧みに齋藤を説き、山本を慫慂す。果然、伊地知と山内とは薩派の傀儡師なりける。(明治四二、一〇)

龜井英三郎論

一

◎新秋八月暴風雨帝都に（のみならず關東及び東北地方にも）殺倒し、小石川・麻布・日本橋の一部、下谷の大半部、淺草・本所・深川の全部は濁流の穢弄する所となり、貧民饑餓に瀕するの窮狀を呈するに至れり。時に總監龜井、舟に乗じて水害市區を巡視するに遭ふ。吾人は端なく知事龜井と同乗して、松島灣頭の風雨を冒したるを想起す。

◎朝來快晴の空頓に陰りて、黒風白雨颯と灣頭の松翠を掠めて去る。舟中林檎を割き、香に酔うて談ず。暫くにして雨歇み、空晴れ、風光繪よりも美也。

◎小蒸汽は即ち鹽釜を出で、代ヶ崎を経て花淵灣を望み、石濱に寄航し、而して後に引き返せる也。一晴の美、一雨の奇、詩腸を洗ふものありと雖も、龜井は遂に一句を捻出するの風流を有せず。

◎小野田元熙は都々逸を吟り、和歌を詠じて俗吏を驚歎せしむ。宮城縣に知事たりし者の中、勝間田稔に次ぎて趣味を解せし男也。彼れの笑ふや哄然たり、その停車場なると、途上なることを問はず。龜井のニヤリと笑ふに比して快活洒落なり。

◎小野田の顔は圓く、毬栗の頭髮の白斑斑たる、鼻下髯の霜を帯びたる、威嚴あるべくして却て愛嬌あり。龜井は薄痘痕にして、顔の色光澤悪く、一見陰鬱なるが如きも、城府を設けずして坐談縱横す。その薄髯は稍滑稽なるも、眼光の炯々たるに依りて威嚴を保持す。彼れは思慮の人也。

◎縣令松平正直は就職の年月久しく、大に縣治を擧げ、今尙縣民に記憶せらる。松平に次ぎて事業をなし、否成さんとしたるは、小野田及び龜井ならずんば非ず。然れども、小野田はなさずして、香川縣に去れり。

◎龜井は無能なる田邊輝實の後を享け、静岡縣より來りて荒廢せる縣廳の一椅子に凭れり。時恰も縣民は連年の水害に疲れ、飢饉に泣き、落日の前に農夫の顔は黄なりき。その悲惨や到底帝都水害の比に非ざりし也。

◎繰返して言はん、龜井は思慮の人にして、精力主義の人なりと。その精力の旺盛な

る、曾て就任せる宮城縣知事中の第一人者也。少壯の點に於ても亦然り。

◎彼れは晝夜兼行して縣治を見、神經衰弱に陥るまでに疲勞せる屬官を鼓舞し、以て事務を整理し、救濟の大計を樹て、窮民を滅亡より救ひたるは、其の精力主義の結果ならずんば非ず。若し老骨田邊の如きをして爲さしめば、縣の秩序の回復は空望に終りしやも知るべからず。

◎兎に角龜井は宮城縣知事として、最も多く仕事をやれり。品井沼開鑿の如き、殖林の如き、漁業獎勵の如き、警察電話架設の如き、宮城病院改築の如きを遂行し、飢饉の後に於ける縣財政を巧に料理したる手腕見るべきものあり。唯品井沼は未了の問題として一部の反感を買ひ、産牛馬問題に關して手を焼きたるも、大なる失體を演せずして、成功知事の名を全うせり。

二

◎龜井英三郎は龍南と號し、肥後人也。始め熊本の廣取豊(嘉悅氏房の私塾)に學び、司法省指定法律學校に入りて佛語を修め、明治二十一年帝大の法律學科(佛蘭西部)を

卒業して、法學士と稱するを得たり。

◎彼れと級を同じうして出でたる者に城數馬(福岡)太田峰三郎(福岡)長森藤吉郎(佐賀)水本豹吉(東京)板垣不二男(山形)故渡邊輝之助(東京)等あり。同年英吉利部を出でたる者に平沼騏一郎(東京)鹽谷恒太郎(東京)大島久滿次(愛知)等あり。

◎大島は臺灣民政長官として辣腕を揮ひ、近く失脚せしと雖も、龜井と共に官界の異彩なりき。太田は貴族院翰長、長森は名聲又昔日の如くならず、渡邊兩山は奇を抱いて、空しく白玉樓中の人となり了んぬ。

◎又同年政治學科を出でたる者に木内重四郎(千葉)松崎藏之助(千葉)薄定吉(岡山)日置益(三重)等あり。薄は龜井の下に宮城縣事務官となり、後岐阜縣知事にまで漕ぎ付けたる男也。

◎吉原三郎、水町袈裟六等は、龜井と同科同部にして翌年の卒業也。有望なる將來を有すと稱せらる。

◎龜井の大學の門を出づる時、成績拔群ならざりしかど、郷費に於ては俊才を以て目

せられき。内田康哉、林田龜太郎は同級にして、共に俊才を以て稱せられたるの人。
 ◎嘉悦は自由黨系の士、龜井は其の門下たるを以て、政治系統よりすれば正に自由黨に結ぶべき也。然るに彼れは大學卒業後は佐々友房に走りて國權黨に結び、濟々費の舎監となりき。思ふに何か曰くのありし事ならん。

◎此の一事を以てすれば、龜井は操守の士に非ずして機智の人の如くなれど、最後まで佐々の爲めに盡したるを以て見れば、忘恩の才人とは斷ずべからず。

◎佐々死するの時、世は政友會内閣の得意時代也。彼れは宮城縣の知事として内相原と杜陵に傲吟し、佐々の訃を聞くや倉皇として密かに任地を發し、其の葬儀に列せり。以て龜井が美なる情の一面を見るべき也。

三

◎政友會内閣斃れて桂内閣成るや、龜井は卒然として警視總監となれり。肥後人にして總監適任者を求めんか、福島縣知事宗像政あり、愛知縣知事深野一三あり。又お手近には警保局長の有松あり、必ずしも其人なきを憂へざる也。而も内相平田の彼れを

拔擢せし所以のもの他にあり。

◎彼れ法制局に出仕せる時、厚く故井上毅に用ゐられ、當時の部長平田の信任を得たり。後出でて知事となるや、静岡に宮城に好成績を擧げ、その才幹漸く中央政府の認むる所となれり。これ龜井の遞相後藤の推輓ありとは云へ、衆を凌いで總監の椅子を贏ち得たる最大原因ならずんば非ず。

◎彼れは或點に於て、後藤を髣髴す。勤勉にして生彩ある、功名の念燃ゆるが如きものある、然らずとは云ふ可からず。或人の「龜井はえらいとか、あれは龜井が遣つたとか云はれる事が大好きだ」と評せしは、確かに痛切の言也。

◎龜井は總監となるや、折花攀柳を廢し、飲酒を禁じ、躬を以て部下を率ゐんとす。聞く。吾人は總監龜井の爲に之を祝す。

四

◎龜井は居常邊服を飾らず、その私宅にあるや着流しに兵兒帶のぐるく巻也。大抵は羽織を着けずして挨拶す。麥酒を自ら注いで、客に薦むるが如きは何とも思はざる

也。彼れの生活は、簡易と云へば極めて簡易也。

◎彼れの巡視するは、尙書生の外出するが如く、行装物々しからず。知事の時も總監の今日も、大した相違は非ず。時に敝衣破帽突如として街衢に現はれ、警官の勤惰と貧民の生活とを察す。これ後藤や龜井に非ずんば出来ざる事なり。

◎本堂平四郎は渺たる青森縣の警部より轉じて、赤阪警察署長となれるの人、總監龜井の片腕ならずんば非ず。

◎本堂は何人も難んじたる掏兒狩をなして、天下の耳目を聳動せり。之が帝都警察の刺戟となり、博徒、竊盜、賣淫の鼠輩を續々檢舉するに至り、一雨の革清に多少の涼を覺ゆ。

◎之を以て見れば、彼れは高等警察よりも、寧ろ普通警察に銳意するに似たり。安樂園田等の政治方面に活動せるに比して、龜井は川路の如く行政に力を致さんとするが如し。何れにしても、市民に公平なるを望まざるを得ず。

◎夫人名はます子、溫柔にして能く家政を整理す。繪畫の趣味を解して、良人の恬淡

なる思想を調和し、紅花一點の春風を送る。敢て龜井論の後に牢記す。(四三、八、一七)

七代議士風手論

◎澤來太郎、自ら無爲庵と稱し、臥牛と號す。もと是れ燕趙悲歌の士也。藤澤農之輔、村松龜一郎は辯護士也。仙臺市に店を張りて相應に繁昌す。首藤陸三は曾て師範學校長たり、仙臺語學校長たりし人也。代言人也。政界の古物也。以上は皆進歩黨に屬す、宮城縣に於ける進歩黨の地盤、牢として抜く可からず。

◎菅原傳の半生は渾沌たり。學校を食ひ荒して得る所なく、僅に布哇に稼いで活路を得たり。故星亨の子分也。今日の位置に上りたるは星の御蔭と黃白の力也。遠藤良吉は、高野孟矩の失格によつて、今議會に一椅子を占む。高野は元角田縣の捕方(今の警官)也。臺灣高等法院長也。而して辯護士也。今は繋がれて鐵窓の下に呻吟す。遠藤は元村長也。曾て縣會議員たりし事あり。罪を得て臭い飯を食ひし男也。齋藤二郎は少壯の辯護士也。

◎高野を除いて、七代議士となす。後の三者は政友會に屬す。今次の總選舉、東北出身の辣腕家原内相の下に行はれ、而して、宮城縣には佐々友房の門より出でたる權謀家龜井知事ありて、尙政友會は二者を贏ち得たるに過ぎず。遠藤の出でたるは、蓋し不時の僥倖也。

◎藤澤は軀幹長大にして、而も好き程に肥ゆ。叩けども鳴らざる鐵佛の如し。村松は肉落ちて顔面骨立し、般若面に似たり。而も體軀矮少にして貧瘦、或は寒巖に倚れる枯木とも云ふ可からん乎。

◎村松の細君は、五斗樽の如し、女人の梅ヶ谷也。赤ら顔にして、でっふりと肥り、普通の帯は逆も用を辨せず。椽を歩むや象の如くミシリ／＼、腕車を降る時誤つて力を入るれば、木履眞ツ二つに割れると云ふ。村松の細君と共に散歩するは、藤澤と携へて歩むよりも更に珍也。爲に、彼れ避易して細君と共に外出せず。

◎澤の細君は美人也。すらりとしたる立姿の如き、惚々するばかり也。口元に愛嬌を湛へて、一たび三絃を彈すれば梁塵將に動かんとす。されど、今は色衰へんとする花

の齡也。多少の俠氣ありて他の窮乏を憫み、又能く亭主の爲に盡す。村松の細君は賢婦人也。でしやばり也。能く婦人會や慈善會に向つて腕車を飛ばす。徒らに飛ばして、愛嬌を振り蒔く也。

◎澤は思つた程の色男に非ず。色淺黒くして、童顔也。鼻下に八字髯ある時は、好個の壯年紳士也。然るに時々之を剃り落し、鼻下に青痕を印するを以て男振りを下げることに夥し。法華經を心讀し、骨董をひねくり、何とか流の居合拔をやり、以て心膽を練ると云ひ、光風霽月に嘯くと稱す。文藝の趣味を解するに於て代議士中の最たり。白眼に青天を仰いで煙草を吹き、悟らんとして迷へるは此の男也。野心鬱勃として、胸裡常に何等かの計を蓄へ、何事をか成さざれば止まず。

◎齋藤は中カラにして俗物也。酔うて管を捲く男也。彼れがたゞの一回にて當選せるは政友會の後援に因る也。機密費の力也。澤は貧乏也。運動費は殆んど有志の寄附也。政府の干涉に危くされて、なほ當選せるは人望あるに因るなるべし。彼れの根城なる栗原郡民は、彼れを産馬界の恩人として多大の感謝を致す。臥牛と産馬との因縁に至

つては説明の限に非ず。

◎此の點に於て、多少の地方的勢力あるは、村長様たりし遠藤也。彼れの地盤は桃生郡也。同郡には遠藤の子分頗る多し。遠藤は鐵拳の雄たり。彼れは人望の上に立つに非ずして、畏敬と戰慄とを拂はれつゝある也。蓋し敬は、敬遠にても可也。

◎遠藤は前年の議會に於て、演壇上の騷擾を好い事にして鐵拳を試みたり。然るに議會に於ける鈴木天眼の發言事件に際して、その鐵拳を見る能はざりしは、聊か物足らぬ感なき能はず。知らず、彼れは遂に愛人の爲に精力を銷盡して、鐵拳の雄を廢したる乎。

◎遠藤は蠻カラにして、蠻音なり。多分老眼鏡ならんが、兎に角餘り緑の光らざる眼鏡を掛け、時にガラにもなく絹半帕にて首を巻く。漆黒なる鬚髯は其の半顔を蔽へり。

◎彼れ一たび口を開けば毒舌縱横、怪辯皮肉他が骨髓を抉らざれば止まず。その態度や不謹慎にして、平氣で良吉一流の際どい風紀論を喋々す。而して、他が流涎するを見て始めて歎む。此の親爺これで中々色氣ある也。

◎藤澤と雖も色氣なきには非ず。額に二條の深い皺が寄りたればとて、其の鼻下の漆黒なる八字髯は尙情慾の旺盛なるを象徴す。然れども、娘の手前あんまり馬鹿な事も出来ざる也。長女、名は龜代、ハイカラにして別嬪也。

◎夫の肥大なるもの、夏日單衣の幅の狭きを憂ふ。動もすれば膝小僧露出し、逸物を他に拜せしむるの失敬を敢てするを以て也。藤澤亦然らざるに非ざるも、彼れは用心するに猿又を以てす。時に緊急動機の提出あるも、周章狼狽せずして済む也。然るに村松は一體が無頓着にて、此の邊の注意を屢々缺く。彼れ眼鏡を鼻尖にたらし、半白の鼻下髯を撫して、座談甚だ興に入れば、瘦せて居ながら露出を敢てす。滑頭冷かに澁紙に垂るゝも、自若として他が失笑を冷眼に附す。事に臨んで恐れざる、老政治家の風骨なきに非ず。

◎菅原の顔は三角也。白首にして、立派に發育したる體格の男也。ちよつと西洋人みたやう也。顔の三角に見ゆるは、鬚髯の所爲でもある也。短く太い鼻下髯、三角錐形の短い鬚髯、刈込んだ髪の恰好、どう見ても准ハイカラ也。布哇から米國まで膝に掛

けた男だけに、いつも洋服をキチンと着用し居る也。

◎菅原の政友に、小野平一郎なるものあり。仙臺の政治家にして、縣會議員也。半白の今日に至るまで、地方の政界に馳驅して、代議士の候補を争ひたる事あるも數次失敗せり。今は縣會の一角に據りて、當局征伐に餘憤を洩しつゝあり。此の男の娘に、ホワイトノーズと唄はれたるハイカラあり。名はきよ子、仙臺に於ける女記者の嚆矢也。小野も菅原に娶はせんとし、きよ子も亦意なきに非ざりしも、菅原は遂に川目亭一の女を娶れり。彼れの結婚は、四十を越えてからなりしを以て、若い細君を可愛がる尋常一様に非ず。

◎首藤は地方の名望家なりしが、今は左程にも非ず。老いて、牛込の邸に病めり。おぢいさん政治家也。其の雄辯の聞くべきものなしと雖も、議席に於て鉛筆を削るを以て名あり。

◎首藤の盛んなりしは、草刈親明の盛んなりし時代也。首藤は進歩黨の雄、草刈は自由黨の傑、共に宮城縣に於ける政黨の中堅にして、政界の花たりし也。草刈逝いて、

首藤は好敵手を失へり。

◎草刈の嗣子は法學士也。首藤の娘は、草刈の伴に惚れたり。草刈の伴も有頂天になりたるを以て、その騒ぎたい事にあらず。政敵なる親爺共はイガミあひ、怒鳴つてばかり居て、若い二人の戀愛を是認せず。伴、大に困りたるなり。

◎草刈は疍癩持で、怒鳴つてからは手の付けられぬ男也。彼れは親爺の性格も知つて居り、愛妾を蓄へて置くをも知りし事なれば、大學に入りてよりは、首藤の娘と共に別に一戸を構へて同棲せり。首藤は止むなく娘には寛なりき。首藤の此の手ごころは矢張政治家としても有つたやう也。(明治四二、四)

竹越與三郎の雅號批判

◎三又を一言にして評すれば三又也。三又なるが故に三又也。吾人は三又の雅號の起因を詳にせずと雖も、偶然にもその人物の總てを語るの好名詞となりたるは奇縁也。
◎三又の世に立つや、先づ文筆を以てせり。これ「又」の第一畫を劃せる也。此の一畫

微りせば、三又今日の名聲を博し得ざりしならん。

◎民友社——『國民之友』、國民新聞社——『國民新聞』、此の四個は、彼れの足と筆とを動かしたる所也。所謂彼れの登龍門ならずんば非ず。

◎三又の『マコウレー』(十二文豪)及び『格朗芝』は、徳富蘆花の『武雷土』、『格武電』、平田久の『カーライル』、宮崎湖處子の『ラルヅラルス』、北村透谷の『エマルソン』、塚越停春の『近松門左衛門』と共に、當時の青年に愛讀せられたるもの也。

◎本邦文壇に於て名を成すは、多くは青年の味方也。而して青年に押し立てられたる者也。徳富蘆花の麾下に集まれる民友社の諸子は、青年の人氣に押し立てられて文名を成せる也。三又も亦御多分に洩れず。

◎彼れは新聞主筆として蘇峰に若かず、記者として福田和五郎の上に出でず、雜誌經營者として山路愛山に優らず。しかも彼れは文壇の雄將たるを失はざる也。

◎彼れが新聞記者としての試金石は、『國民新聞』也。當時の『國民新聞』の如く、理想の閑文字と團點とにて讀者を吸收せし時代に於ては、彼れは適材なりしやも知るべか

らず。然れども、『愛弟通信』の國木田獨歩の如く天下の耳目を惹くに至らざりき。

◎一體は花々しき活動をなす男に非ず、何となく地道也。今日の彼れはハイカラなるにもせよ、當時は基督教信者にて、極めて眞面目なりし。

◎マコウレーは、必ずや彼れの理想とせる所ならざるべからず。著書『マコウレー』の青年を感化せしが如く、彼れ自身も亦尠からの感化を受けぬ。嗚呼新日本のマコウレー！三又の抱負は、實に斯の如かりしを想像するに難からず。

◎『世界之日本』は彼れの野心を満足せしむるに至らず、中途にして廢刊するの止むなきに至れるも、『二千五百年史』は彼れの自負を値する好結果を齎せり。

◎史學界に於ける『二千五百年史』と、地學界に於ける『日本風景論』(志賀重昂)とは、當年の出版界を震動せる二大新著なり。

◎一は新趣味の歴史也、一は新趣味の地理也。世人は淺漬の新しき味を愛すると同一の嗜好を以て歡迎し、其の滋味を吟味せしは少數の讀者に過ぎざりしも、發賣部數の多かりしは廣告に非ずして事實也。

◎『二千五百年史』は、當時史家の筆にし得ざりし事を大膽に書せり。カビ臭き日本歴史を棄てて、新しき日本歴史を作れり。この書は糊と剪の歴史に非ずして、彼れ一家の新研究也。

◎彼れの書を精細に批評し、彼れの書の缺點を指摘するは煩瑣多岐に亘るの恐れあるを以て之を省き、更に進で彼れの政治的方面を窺はん。

◎三又は全く文界と絶縁せりとは云ふべからざるも、今や既に政治壇上の人となれり。これ『又』の第二書を加へたる也。此の一畫こそは相支へて以て、活動の舞臺に立たしむる者なれ。

◎彼れは政友會所屬の代議士也。彼れ選良の席を占めて議場に列するや、松本君平、望月小太郎の徒と共に『三ハイカラ』と稱せらる。然るに後者二人、中原の鹿を逐ひ損ねて今在らず、三又獨りハイカラの空名を存す。

◎演壇上に立ちたる彼れの風采は、如何にも詭向のハイカラ也。俄仕入のキザな點なく、一個の品格を具へたる所、ハイカラの上乗なるもの也。

◎三又の向うを張るは、蠻カラの藏原惟郭ならずんば非ず。惟郭の雄辯は殷々たる巨鐘の響の如く、三又の能辯は輕妙なるピンポンの音に似たり。

◎惟郭の論旨は稍粗放散漫なるを免れざるも、彼れの一語は直ちに聽者の肺腑を突き、恍として徒らに拍手讃嘆せしむるの魅力を有す。三又は之に反して理路井然たるも、音量氣力共に稀薄にして、聽者を捕ふる事能はず。

◎要するに三又は、舌の人に非ずして筆の人也。政治家としての貫祿に乏し。猪コ參、與コ參と並び稱せられたる當時を懷うて、ハイカラの彼れに煩ひするなきやを疑ふ。

◎三又は北守南進論者也。彼れは此の政見を以て天下に落み、言論に、文筆に唱導して倦まず。反響甚だ大ならずと雖も、一部の人士は夙に此の政見を是認せり。

◎國民黨の政綱は、全然彼れの北守南進論と一致す。太平洋問題の解決は、彼等の希望する所ならずんば非ず。吾人は三又の所論と犬養一派の論策との先後の如きは、敢て問ふ所に非ざる也。

◎三又の『南國記』は、未だ讀まざるも、思ふに『二千五百年史』以後の快著なるべし。

◎最後に臨みて、『又』の畫龍に點睛せざるべからず。此の一點は才子の瓊瑤なる、漁色を語るもの也。

◎斯くて、吾人の三又批判は終る。旅中匆々の筆、意を盡さざる處甚だ少からず。本日秋風冷を送りて、東北の秋冷更に一層の冷を加へ、柿實赤く熟して枝頭にあり。

(四十三年十月九日、阿武隈河畔にて)

下篇 南人北人

視界に映ずる陸軍の將星

一

▼將星、星の如く列る——洵に美しい形容詞である。戦時に於ては血腥い將軍も、平時に在つては畫趣の人で、其の帽章肩章から云つても、勳章を胸に輝かした恰好から云つても、星の如くと云ふ形容詞の徒爾ならざるを感ずる。眼を開いて陸軍の分野を見ると、其の將星が満天の星宿のやうに耀いてゐる。大きな星の光芒におされて薄く見えるもあれば、糠星のやうでも強い光明を放つて居るのがある。雲に遮られて姿を失つても、其の雲が去れば勢力を回復して鮮かに光つて居るものもある。関に遠い者は小さく見えるが、却々馬鹿に出來ない程大きなものがある。どれ、是れから視界に映ずる明星を始め、天王星、海王星に至るまで、此の一指を以て指呼して見ようか。

▼元帥府は公柱の設けたもので、軍事参議院は伯寺内の陸相時代に成つたものである。是れは陸海軍共通のもので、其の元老、元勳と云ふ様な人々が祭り込まれてゐる。陸軍の元帥は山縣有朋、大山巖、奥保鞏で、黒木爲楨は與らぬ。黒木は戦將の器で、軍政家ではないが、人格なり手腕なり當代に傑出してゐる。奥は日露戦役に難局に當つた爲めに、其の卓抜なる手腕を發揮した。人物は沈毅で大きい所はあるが、少しく阿諛癖がある。乃木とか、黒木とか云ふ將星と、其の光が違つてゐる。奥の性格の光が金色でなければ、反感を持つ軍人もないのであるが、夫れが有るばかりで、如何程輝いて居ても、其の光が薄いやうな氣持がする。將星は將星で、枯木の間からでも光つて居れば趣のあるものだ。

▼陸相の地位を得たものは、師團長や何かで居ても、軍政家の風が有ると稱された人物である。木越安綱、上原勇作などが夫れた。寺内正毅は豫告の人ではなかつたが、或機會でメキ／＼頭を擡げて來た。今日は朝鮮總督で收まつて居るが、其の方面でも皮肉に仕事をやつてゐる。韓國を併せる事から、統監府時代の積弊の掃除を試みた段

取まで、武斷的だとか、壓制的だとか、素的滅法に攻撃されたが、著々やるだけの事は行つてゐる。東拓總裁の宇佐川一正、關東州の福島安正、臺灣の佐久間左馬太などは、其の方面相當の人物とも思はれないが、依然として其の職に止まつてゐる。宇佐川は兎角の評がある、大きな玄關だけ張つて居ても事業があがらなくては仕方がない。佐久間は風采骨柄の偉大で、蕃族を壓してゐるが、唯夫れ壓して居るだけである。椅子に腰を下して眠つて居ても、民政長官にさへ手腕家が居れば成績を擧げ得ると云ふ人物である。福島は英氣颯爽としてゐるが、殖民地的人物でない。参謀本部などは好い据り所と思ふが、敬遠されたのを見ると、何か事情があるのだらう。

二

▼参謀本部の總長が長谷川好道で、陸相は楠瀬幸彦である。どうも反りが合ひさうも無いと見られて居るが、お互に砲火を浴せるやうな事も爲まい。増師は陸軍の豫定行動だから、楠瀬でも肘鐵をドンと呉れて、サーベルを自分の腹に當てるやうな愚を演じまい。長谷川と本來反りが合はんでも、今の所、増師で内輪喧嘩を始めさうでもない。

い。次官の本郷房太郎、軍務局長の柴勝三郎、何れも生彩がある。本郷は用意周到で、事務的手腕がある。妙に部下に人望のある男で、能く人物の能不能を鑑別して用ゐる事が旨いと云はれてゐる。柴は押の強い男で、自己の所信を貫くまでは、泥溝板を踏み外す迄やると云つた氣風で、意志の人である。軍政的手腕の無いではないが、より以上に參謀官の適任者と認められてゐる。第四師團長大迫尙道を總長に据ゑて、柴を次長にでもすれば、理想的だがな杯と云ふ聲を屢聞く。之を聞いたなら、現次長の大島健一などは快くあるまい。大島は山縣の秘書官を勤めて、大に信任されたものである。関外の人は白い眼で睨めつけるが、彼れは夫れほど依怙偏頗な質ではない。器局は宇佐川などのやうに大きくは無いが、夫れだけ事務的手腕が勝れてゐる。長谷川には、相應な女房役である。

▼仙波太郎は陸相候補者を以て目されてゐるが、寺内とは反りが合ふまい。洋行後は蠻骨に大分磨きか利いたと見えて、少し圓みが出来たが、義太夫口調で戦術を讀むと云ふ離れ業はまだ止めない。唯餘りに鋒銜を露はさないと云ふ迄で、豪放は依然として豪放である。智能才略一世を蓋ふほどの傑物ではないが、將星中では異彩を放つてゐる。用兵家としては井口省吾、松川敏胤と伍して、決して遜色はない。成功者は大抵氣驕つて新進に蹴落されるが、仙波は豪放ではあるが細心な點があり、無性者らしいが勉強家で、新知識の吸収を怠らない。近來大に油が乗つて來たから、其の前途頗る注目に値する。

三

▼軍務局長は、桂太郎を出して以來、其の椅子に値打がついて、寧ろ次官などよりも重く見られる傾向がある。柴の本郷よりも注意人物視されて居るのも、其の爲めである。今、試みに過去の軍務局長を一瞥して見よう。

▼中村雄二郎は現に製鐵所長官で、技術官としては傑出してゐる。日清戦役以前の技術官で、當時は大佐で砲兵課長、次で軍事課長と云ふ順序に進んで來た。本省に居た日月は短くないが、軍務局長としては格別の手腕を揮ひ得なかつた。人物は圓満で圭角がないから軍政に向きさうだが、霸氣に乏しいので素晴らしい仕事は出來ない。長岡

外史は、彼れと反對に、霸氣満々、手腕縦横と云ふ人物である。中村の下に軍事課長で居た頃から頭角を現はし、局長に進むに至つては、省内を縦横無盡に切り捲つて居た。教導團を廢止して現今の下士採用制度に改めたのは彼れの事業で、桂が師團司令部を設けて師團編成を告げた以來の目ざましい遺口であつた。一時は長岡大臣と稱され、陸軍部内の明星として輝いて居たが、妬雲の襲ふ所となつて、美名の下に歐洲に追はれ、歸朝後廣島の旅團長でくすぶつて居た。現に高田の師團長で穴籠りをして居るが、仙波と共に、長く田舎に埋没するのは惜しい人物である。

▼政變の際に、次官から第三師團長に轉じた岡市之助は、人事課長の時に手腕を認められた。人物は穩健で、圭角がないので、ぼんくらの様に見える。多くの人は好人物と見て、馬鹿にして掛かるが、どつこい然うは欺かれない男である。攻城野戦の勇ではないから、舞臺面では華々しい格闘振を見せないが、黒幕一重の裏では眼の光まで違つて、乾坤一擲の畫策をも敢てする。其の切れ味と云つたら、凄いものである。然うした策士であるだけ、長閑からは重寶がられてゐる。田中義一は岡のやうに、周密

な畫策は出來ないが、露骨に切り捲つて行く。突貫的豪傑である。頭腦が粗笨で、街氣はあるが、器局は大きいやうだ。三寸の舌頭に人を説き伏せるとか、一種の腕を揮つて部下を籠蓋するとか、そんな事は朝飯前にやつてのける。事務的手腕に長じて居るとは思へないが、事務の大綱を握つて、誤なく指導して行くだけの眼識はある。明星長岡とは別種の光彩を持つてゐるが、霸氣のある所が稍似寄つてゐる。新進の將星中では、性格の光の鋭さは、輒く視界を去るものでない。

四

▼師團長で傑出して居るのは、第一の一戸兵衛である。一戸は青森縣の出身で、系統から云へば餘り羽振の好い方ではないが、人格や力量の點で推服されてゐる。陸相になれば陸相の職も執り得る人物であるが、軍政家に轉ずれば或は仕損じがないとも限らぬ。上田有澤は、日露戦役では失敗がちであつたが、夫れ程のぼんくらでは無い。智略があつて、外國語にも達して居り、辯舌にも長じてゐる。攻城野戦の適材ではないが、軍政家として立てば、相應に仕事が出来よう。

▼教育總監の淺田信興は、戰將の器で、陸軍教育の適材であるかは疑はしい。日露戰役には旅順攻撃に参加して、偉功を樹てた一人である。大迫尙敏も當時の勇將であるが、重厚な人格は學習院長の適任なるを語つてゐる。東京衛戍總督の中村覺は、白樺隊の指揮官となつて陣頭に立ち、戰役中の餘興としては見事なものであつた。人物は溫柔で、交際社會には持てるが、戰將としては其の器を疑はれてゐる。騎兵出身の秋山好古は、豪膽剛直の資質で、傑物と云ふことが誰の眼にも映ずる。長沼秀文は奉天の戰爭の殊勳者で、夫れ以來頭角を擡げて來た。松川のやうな謀將ではないが、奇智があつて、當意即妙の早業を演ずるに適してゐる。

▼第六師團長の梅澤道治は、花の梅澤と稱され、其の名は兒童走卒にまで謳はれてゐる。當時は摺澤靜夫、黒澤源三郎と共に、仙臺出身の三將軍と持て囃されたが、露西亞通の黒澤が經綸もあり抱負もあつて、梅澤よりは勝れて居たやうだ。蓋し梅澤は戰將の器で、黒澤は軍政家として手腕を現はし得る男であらう。が、少將だけで首になつた。

▼其他、雲際に光を曳いてゐる人物には、侍從武官長の内山小二郎、旅順要塞司令官の青木宣純、下の關要塞の柴五郎、由良の阿部貞次郎、野戰砲兵監星野金吾、騎兵監豊邊新作等がある。柴は會津の出身で、中でも異彩を放つてゐる。(大正四、七、八)

海軍の諸雄才

▼海軍の大立物は、悉く薩人である。元帥府に祭り込まれてゐる伊東祐亨、東郷平八郎、皆薩人である。日清戰役當時の花形樺山資紀、日露戰役當時の花形上村彦之丞、片岡七郎、柴山矢八、鮫島員規等は、總て薩人である。海軍の要樞は、全く薩人の專有であつて、薩人でなければ海軍々人で無いと云ふやうな時代もあつた。が、時代の推移と共に、漸次長州人が入り込む事となつた。又一面から見れば、薩人だけでは、到底人物を補充する事が出來ないので、門戸を開放して他州人を迎へねばならぬやうな事情もあつた。今日こそ薩派的觀念を抱いて居れ、少壯氣銳の山本權兵衛は、軍務

局長時代に海軍部内の廓清を試み、老朽淘汰を断行して、他州人と雖も用ゐるに足るべき者は、大に登用したものである。大に登用したと云つても、要樞は悉く薩人で占めて居たから、實は佐尉官ぐらゐの進路を開いたに過ぎなかつたのである。併し乍ら其の結果は今日に現はれて、海軍の要職も他州人に與へる事になつたのである。生れは他州人でも薩化して居る者もあるから一概には云へないが、純粹の薩人は日露戦役後大に減少を示してゐる。

▼數の上では、確かに減少を示してゐるが、海軍擴張と共に増殖しない迄で、實際は目に見えるほど減少して居るのではない。其の要樞は依然として薩人、乃至薩化人で把握してゐる。海相の齋藤實は岩手縣出身ではあるが、閩閩關係上薩派の色彩に活きてゐる人である。次官の財部彪は宮崎縣出身で權兵衛の愛婿である。政務機關は確と薩の手に握つてゐるが、さて軍令機關はと見れば、軍令部長は薩人の伊集院五郎である。次長の藤井軌一は岡山縣人であるが、薩化してゐる人物である。而して是等を統率して立つ所の人物は、云ふ迄もなく山本權兵衛である。彼れは大將で、首相であるから

ではない。彼れは夙に海軍の中心人物となり、長の陸軍に對して、薩の海軍を代表して居たのである。で、海軍の全權は、殆んど彼れの掌中に握られて居たと云ふも、過言ではないのだ。山本は普通ならば、矢八のやうに引込んで居るべきだが、彼れはまだ却々老人連とは伍さない。今度罷めても最う一度位は首相になる積りである。縦令元帥になつても、海軍の實權を握つて居て、放すものでは無からうと云はれてゐる。夫れ程に、山本は海軍を薩の手から捨てまいと、頑張つて居るのである。

▼横須賀鎮守府司令長官の山田彦八、第二艦隊司令長官の伊地知季珍は薩人であるが、軍人であつて軍政家ではない。伊集院は軍令を握つて居るが、軍政方面に出れば、やはり軍政方面に活動し得る人物である。第一艦隊司令長官の出羽重遠は福島縣人であるが、長派に重きをなして居る。伊集院、出羽共に海相の椅子を占めるか何うかは問題である。財部は一躍して海相になつても可からうが、彼れのなる前に、唯か一人其の間に挟まるに相違ない。島村速雄か、松本和か、彼等の名も、豫想者の中に入つてゐる筈である。

▼島村高知縣の出身で、佐世保鎮守府司令長官をやつてゐる。松本は東京の人で、艦政本部長である。島村は日露戦役の際嶄然頭角を顯はし、特に其の報告の文章の簡潔莊重なるを以て知られた。頭腦が明晰で、備敏で、部下を操縦するの才もあるので、注目されてゐる。松本は軍政家として、出羽と雁行する一人である。出羽は精悍で、おれを三日でも可いから海相にするなら、長の陸軍に對して開戦して見せる杯と、増師開題の際に威張つて居たものだ。松本はそんな強がりには云はないが、多少幫間臭はある。松本を擧げれば、又朽内會次郎を忘れてはならぬ。松本は交際に長じ。朽内は事務に鍊達してゐる。山内萬善治は松本等と共に濁肉派のやうに云はれて居たが、山本の智識となつて或方面に凄腕を揮つたものである。

▼第三艦隊司令長官の名和又八郎は石川縣人で、教育本部長の吉松茂太郎は高知縣の出身、舞鶴鎮守府司令長官の八代六郎は愛知縣人である。八代は、和歌山縣出身の有馬良橘と共に其の名を轟はれた男である。有馬は勇敢、八代は酒脱、善く其の地方色を表はしてゐる。八代は旅順閉塞隊の勇士を送るべく、其夜甲板上で別離の尺八を吹いたので、風流の名が高くなつたが、彼れは士氣の振作を口にして居るだけ、己れの身を持つること謹嚴である。そして親分肌があつて、阿睹物に淡泊な所は中京人と思はれない程である。唯其の風流酒脱の點は、確かに好個の中京人である。

▼吳鎮守府司令長官の加藤友三郎は、前海軍次官で、廣島縣の出身だ。八代は豪放で酒脱、伊知地は豪放で勇猛、山田は豪膽で勁烈と、斯う鎮守府長官を比較して來ると、加藤は如上の人物より赤錆がとれてゐる。思慮周密で、籌略がある。軍政方面にも手腕を揮ひ得る男ではあるが、參謀から叩き上げただけに、軍令部などは適處かも知れぬ。財部は日露戦役の際に軍令部參謀で、精力の強いのと、的確な計畫を立てるので稱されて居た。夫れが次官に轉じたのであるが、今日は山本の後援で以て、齋藤の智囊となつて海軍省を切つて廻してゐる。山本の愛婿と云へば、夫れが海軍に最う一人ゐる。山路一善と云ふ男だが、財部に比べると、頭腦手腕共に問題にならぬ。併し權兵衛も何か見る所があつて娘を遣つたのだから、滿更捨てた人物でもあるまい。大器

晩成の格で、財部の耄碌した時分に頭を擡げるかも知れぬ。

三

▼ちよいと此の邊で觀察點を換へて、海軍文學の人材を物色しようか。先づ疑と眼を注ぐと、新熟語で有名な『舷々相摩す』の作者に、秋山眞之がある。小笠原長生、佐藤鐵太郎がある。まだ佐官ではあるが『此一戦』の著者水野廣徳がある。水野の著書は、出版界に黄海の大海戦以上の刺戟を與へたとの評判。

▼眞之は、將軍秋山好古の實弟で、愛媛の産である。佐藤は山形縣の出身で、國防論者である。秋山は神算奇謀と云へば餘り褒め過ぎるが、遠く慮つて雄大な計畫を立てる。兄貴ほどでは無いが、豪膽で、沈著な態度を持して居る。佐藤は細心周到で、調査が綿密であるが、其の意見を發表する時は放膽文で、何等躊躇する所がない。對手國に對して遠慮しなければならん事でも、平氣で痛快に論破する。前者を美文家とすれば、後者は論文家である。此の二者に比すれば小笠原は紀行文家ぐらゐな所で、あつさりして居る。人物も亦其の通りで、洒落で、淡泊で、經綸策などを喋々する人で

い。海軍戰術家の双璧と云へば、當分佐藤、秋山二人に屈するの外なからう。

▼薩の海軍も、斯う新人物を擧げる事になると、非長人が多い。殊に山形縣には有望な奴が澤山ある。此の程佐世保水雷隊司令官になつた上泉德彌は、其の豪い點に於て佐藤に劣らぬ。鎮海灣の經營を完成したのも、彼れの功多きに居るのである。長派からは、毛嫌ひされてるやうだが、頭腦も手腕も群を抜いてゐる。又、山下源太郎は、戰術上の新智識を以て鳴つてゐる。其の後進には、今村信次郎、下村忠助等の刀劍組が控へてゐる。

▼水路部長の川島令次郎は、石川縣の出身で、才氣煥發の好將官である。肝付兼行のやうな學者肌の男ではないから、適材の適處にあるものと思はれぬ。彼れは一昨年、南清革命の時は、第三艦隊司令官として南清の警備に當つて居た。圓轉滑脱で、交際が旨く、機宜の處置を取るに敏捷であつたから、歐米の軍人間に惡評を蒙らなかつた。海軍外交家とでも云ふべき、一種の手腕を持つてゐる人物である。(大正二、一〇)

内閣更迭一覽

其一

▼第 伊藤 一 内閣次 (明治十八年十二月廿二日成立) 同廿一年四月三十日五解

▼第 黒田 内閣次 (同廿一年四月廿四日五解) 同廿一年十一月廿六日五解

▼第 山縣 一 内閣次 (同廿二年十一月廿六日五解) 同廿二年五月五解

▼第 松方 一 内閣次 (同廿四年五月廿六日五解) 同廿四年八月廿八日五解

▼第 伊藤 二 内閣次 (同廿五年八月廿八日五解) 同廿五年十一月廿八日五解

(元勳内閣又は井伊内閣)

.....

第一議會 廿三年十一月廿五日召集 九日間開期延長

第二議會 廿四年十一月廿一日召集 同廿五年五月二日召集

第三議會 同廿五年五月二日召集 七日間停會

第四議會 廿五年十一月廿五日召集 十五日開停會 二日間延長

第五議會 廿六年十一月廿五日召集 十日開停會 停會

第六議會 廿七年五月廿二日召集 同廿七年六月十五日召集

第七議會 同廿七年六月十五日召集 廣島に召集

第八議會 廿七年十二月廿二日召集

第九議會 廿八年十二月廿五日召集 十日開停會 二日間延長

▼第 松方 二 内閣次 (同廿九年九月十八日五解) 同廿九年十二月廿五日五解

▼第 伊藤 三 内閣次 (同廿一年一月廿五日五解) 同廿一年六月廿五日五解

▼第 隈板 内閣次 (同廿一年四月廿五日五解) 同廿一年六月廿五日五解

(憲政黨内閣)

▼第 山縣 二 内閣次 (同廿一年九月十八日五解) 同廿一年十一月廿六日五解

▼第 伊藤 四 内閣次 (同廿三年五月十八日五解) 同廿三年八月十八日五解

▼第 桂 一 内閣次 (同廿四年六月廿七日五解) 同廿四年七月七日止

.....

第十議會 廿九年十二月廿二日召集 同廿九年十二月廿五日召集

第十一議會 同廿九年十二月廿五日召集 同廿九年五月十四日召集 十日開停會 七日開延長 同廿九年六月十日解散

第十二議會 同廿一年十一月七日召集 七日開延長

第十三議會 同廿二年十一月廿日召集 四日間延長

第十四議會 同廿三年十二月廿二日召集 十五日開、五日開、停會

第十五議會 同廿四年十二月七日召集 同廿五年十二月五日召集 五日開、七日開、停會

第十六議會 同廿六年五月八日召集 同廿六年五月廿八日召集 三日開停會 三日開延長

第十七議會 同廿六年十二月廿五日召集 同廿六年十二月廿五日召集

第十八議會 同廿七年三月十八日召集

第十九議會 同廿七年十一月十八日召集

第二十議會 同廿七年十一月十八日召集

内閣更迭一覽

四八七

▼第 西園寺内閣次 (廿九年一月七日成立) 第廿二議會 (廿八年十二月廿五日召集)

在任 二十一年七月四日總辭職

第廿三議會 (廿九年十二月廿五日召集)

第廿四議會 (四十年十二月廿五日召集)

▼第 桂内閣次 (四十四年七月十四日成立) 第廿五議會 (四十一年十二月廿二日召集)

在任 四十四年八月十日總辭職

第廿六議會 (四十二年十二月廿二日召集)

第廿七議會 (四十三年十二月二十日召集)

▼第 西園寺内閣次 (大正四年八月卅日成立) 第廿八議會 (四十四年十二月廿三日召集)

在任 大正四年十二月五日總辭職

第廿九議會 (大正元年八月廿一日召集)

御大葬臨時議會

▼第 桂内閣次 (二年十二月廿一日成立) 第卅一議會 (二年十二月廿四日召集)

在任 二年五月十日總辭職

第卅二議會 (三年五月四日召集)

第卅三議會 (三年六月廿日召集)

第卅四議會 (皇太后大葬臨時議會)

第卅五議會 (日親王臨時議會)

第卅六議會 (同年同月廿六日解散)

第卅七議會 (四年五月十七日召集)

第卅八議會 (四年十二月廿九日召集)

▲山本内閣 (三年四月十六日成立) 第卅一議會 (二年十二月廿四日召集)

在任 三年四月十六日總辭職

三日間停會

▼大隈内閣 (三年四月十六日成立)

五年十月四日首相辭職

▼寺内内閣 (五年十月九日成立) 第卅八議會 (五年十二月廿五日召集)

第卅九議會 (六年一月廿五日解散)

第六年六月二十一日召集

其二

年月	總理	外務	内務	大藏	陸軍	海軍	司法	文部	農商務	逓信
一九三	伊藤博文	井上馨	山縣有朋	方正義	大山巖	西鄉從道	山田綱義	谷	西鄉(兼任)	千成
一九七						大山(兼任)		西鄉(兼任)	山縣(兼任)	高知
一九六								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
一九七								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
一九八								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
一九九	伊藤(兼任)							谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇〇								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇一								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇二								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇三								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇四								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇五								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇六								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇七								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇八								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二〇九								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一〇								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一一								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一二								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一三								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一四								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一五								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一六								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一七								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一八								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二一九								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二〇								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二一								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二二								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二三								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二四								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二五								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二六								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二七								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二八								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二二九								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三〇								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三一								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三二								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三三								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三四								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三五								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三六								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三七								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三八								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二三九								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四〇								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四一								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四二								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四三								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四四								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四五								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四六								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四七								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四八								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二四九								谷(復職)	山縣(兼任)	高知
二五〇								谷(復職)	山縣(兼任)	高知

内閣更迭一覽

四八九

二六	楠瀬 幸彦 高知五六								
三〇	奥田 (臨時兼任)	奥田 義人 島根五四	奥田 義人 長谷湯純孝 高知六〇	大岡 青造 山口五六	大浦 兼武 高知六五	大浦 兼武 高知六六	大隈(兼任) 一木喜徳郎 高知四九	大隈(兼任) 石井菊太郎 高知五〇	寺内正毅 山口六五
三一									寺内(兼任) 後藤新平 高知六〇
三二									本野 一郎 高知五五
三三									
三四									
三五									
三六									
三七									
三八									
三九									
四〇									
四一									
四二									
四三									
四四									
四五									
四六									
四七									
四八									
四九									
五〇									
五一									
五二									

大正六年六月二十日印刷
大正六年六月廿五日發行

元老と新人

定價金壹圓參拾錢

著作者

吉野 鐵 拳 禪

東京市本郷區本郷三丁目十七番地
株式會社三育社代表者

發行者

淺原 新助

東京市麴町區有樂町二丁目一番地

印刷者

川西 房 治 郎

東京市麴町區有樂町二丁目一番地

印刷所

報 文 社



發行所

株式會社 三

育 社

東京市本郷區本郷三丁目十七番地

電話 下谷六五〇貳番
振替東京貳貳貳貳番

東京生花研究會長 尾崎恒子先生著

第四編 生花

四六判四百餘頁
極彩布製表紙
插圖木版百貳拾種
定價金壹圓參拾錢
送料金八錢

本書は敢て其流派に偏せず其古實に囚はれず真正なる生花の趣旨、法則により何れの場合にも最も必要なる投入と盛花に就き著者多年の研究と經驗に基かれあらゆる方面より左の順序に従ひ壹百貳拾餘種の圖解を以て懇切丁寧に一々其蘊奥を説き秘訣を述べられたる現今生花書類中他に其比を見ざる最も優良嶄新なる珍書なり蓋女學校、女教師及び生花教授者の良參考書たるは勿論奥様令嬢方の必須缺くべからざる生花寶典なり。

第一章	投入と盛花	第五章	參考圖解	第十一章	盛花の種類
第二章	精論	第六章	佳節の花の用ゐ方	附錄	
第三章	投入花	第七章	參考圖解	國華	
第四章	投入花を挿す順序	第八章	盆花	花の傳説及神話等	
	盆花は如何に用ゆべきか	第九章	盆花	花の傳説	
		第十章	水盆	花言葉(三百餘種)	

363

198

終